

第 66 回九州地区英語教育研究大会（日本ひなた宮崎大会）報告書 目次

大会終了のご挨拶	P 2		
Greeting Remarks	P 3		
大会概要	P 4		
分科会一覧	P 6		
講演会記録	P 8		
「小・中・高を貫く授業設計の観点」～英語教育改革のピットフォールと対策の講じ方～ 長嶺 寿宣 氏 熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授				
公開授業記録（指導案・合評会報告）				
小学校	宮崎市立西池小学校	金丸 瞳子	P 11
中学校	宮崎市立生目南中学校	小川 馨	P 18
高等学校	宮崎県立高鍋高等学校	肥田木 洋之	P 25
分科会 I 記録（発表タイトル+質疑応答等）				
1 A 大分県	大分県立大分鶴崎高等学校	牛島 大輔	P 29
2 A 沖縄県	糸満市立糸満中学校	玉城 昇太	P 31
3 A 鹿児島県	鹿児島県立大島高等学校	吉原 宇勇	P 33
4 A 長崎県	南島原市立深江中学校	荒木 美香	P 35
5 A 鹿児島県	鹿児島市立伊敷中学校	山下 里紗	P 37
6 A 佐賀県	佐賀県立鳥栖高等学校	宮西紀生・浜崎勇太	P 39
7 A 熊本県	山鹿市立菊鹿・鹿本中学校	益本真裕・福岡真理	P 41
8 A 熊本県	熊本県立第二高等学校	堤 厚	P 43
9 A 宮崎県	三股町立三股西小学校	藤原 綾子	P 45
分科会 II 記録（発表タイトル+質疑応答等）				
1 B 佐賀県	嬉野市立吉田中学校	杉光 いづみ	P 47
2 B 宮崎県	宮崎県立福島高等学校	村上 泰子	P 48
3 B 宮崎県	宮崎市立佐土原中学校	平川 由香・Christine Spiers	P 50
4 B 沖縄県	沖縄県立前原高等学校	伊波 志麻子	P 52
5 B 福岡県	福岡県立輝翔館中等教育学校	西里 勇希	P 54
6 B 大分県	日田市立南部中学校	波多野 繭	P 56
7 B 長崎県	長崎県立長崎南高等学校	近藤 栄作	P 58
8 B 福岡県	飯塚市立第一中学校	松崎 綾	P 60
9 B 宮崎県	宮崎大学教育学部附属小学校	齋藤 匠	P 63
大会経過報告		P 65	
編集後記		P 67	

九英連宮崎大会終了のご挨拶

九州地区英語教育研究団体連合会

会長 宮野原 章史

(宮崎県高英研会長)

第66回九州地区英語教育研究大会宮崎大会につきましては、平成30年10月19日、20日に、宮崎県立芸術劇場を主会場として、御来賓を始め、九州各県から約600名の皆様にご参加いただきました。また、100名以上の小学校英語教育関係者にもご参加いただき、お陰をもちまして大盛会の内に終了することができました。関係の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

今大会では、「はぐくもう！未来の国際人！」というテーマのもと、九英連大会史上初の小学校公開授業を行いました。小学校部会の立ち上げから出発し、たくさんの関係の皆さんのが献身的なお力添えをいただき、特に担当された宮崎市立西池小学校の皆さんのが頑張りで、ひとつの指導例が提示できたと思います。ご観覧頂いた先生方が、それぞれの現場での実践に生かされることを願っています。

また、中学校・高等学校の公開授業も例年通り行うことができました。一方で、授業合評会をどうしても全体会場において開催したいという思いがあり、時間の関係上、授業を別会場にて同時開催致しました。この点については、両方の参観ご希望に添えず申し訳なく思います。

一方で、全体の場での各授業の合評会を通して、授業者や助言者の思いを伝え、そして参観者のご質問に答えることができたという点で大きな意義があったと考えております。今大会の3つの公開授業により、九州各県に宮崎県の英語教育の理想型を発信できたのではないかと思います。各参加者の実践に繋がれば幸いです。

講演いただいた熊本大学の長嶺寿宣准教授は、「小中高を貫く授業設計の観点」という演題のもと、我々英語教育に携わっている者がともすれば陥りやすいピットフォールを説明され、そのための対策も合わせて御講演いただきました。また、早期英語教育を既に行っている他国における状況についての説明もあり、高い賛同を頂きました。

大会後のアンケートを見ますと、お陰様でほとんどの方が多くの項目について高評価をつけていただきました。本大会内容が参加者の皆さんのが現場において、日常のご指導に生かされることを期待しております。

私事ですが、これまで4回の九英連大会を宮崎県が担当した際に係わりました。20代30代の時には事務局として、7年前の前回は副会長として、そして今回は会長でした。

様々な先生方のお力添えにより、このような大きな大会が成功裡に終了した喜びは何物にも代えがたいものです。本当に貴重な経験をさせて頂きました。全ての関係者の皆さんに心より御礼を申し上げ、終了のご挨拶とさせて頂きます。

Greeting Remarks

It is a great privilege for me to welcome you from all areas of Kyushu region to the 66th Kyushu regional English Research Seminar in Miyazaki.

Miyazaki is, as you probably know, famous for its beautiful sceneries and good foods. We would be very happy if you enjoy your stay in Miyazaki by visiting our touring spots and trying our local dishes. Chicken nanban, mango fruits and Aoshima Beach are must-try things in Miyazaki. I strongly recommend you try these things.

We have been preparing for this seminar for these two years and we are now ready for that. We have, for the first time in the history of this seminar, three demonstration classes, including an elementary English class. In this class, 40 elementary school children are going to show you how they study English.

As the new course of study stipulates, proactive, interactive, and deep learning has been proposed to introduce into our class. In this point of view, a key word is interactive. Our students must exchange their own ideas with each other by using English and in this process, they can become interactive. Our demonstration classes are going to make some suggestions for you to consider in order to improve your own classes.

Considering the time schedule, we have to show you a demonstration class by elementary school children first, and then junior and high school classes at the same time but in different places. I would appreciate it if you would make a more suitable choice for you.

One thing we should keep in mind is that the new course of study includes a subject called “Logic and Expression,” instead of “English Expression.” This name, especially “Logic,” suggests to us that logical thinking and expressing in English should be more important in the near future or already at present.

In the afternoon lecture, we have a distinguished speaker, Dr. Toshinobu Nagamine, from Kumamoto University, who is going to give us a stimulating lecture.

Lastly, I would once again like to express my sincere gratitude to you all for your participation. I really hope that this seminar will give you wonderful ideas and great opportunities to help you with your teaching English in your classroom. Thank you.

Shoji MiyanoHara

President of Kyushu Regional Federation of English Research

第66回 九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会）概要

1 主 催	九州地区英語教育団体連合会 宮崎県中学校教育研究会英語部会	宮崎県小学校外国語活動研究会 宮崎県高等学校教育研究会英語部会																																
2 後 援	宮崎県教育委員会 宮崎県私立中学高等学校協会	宮崎市教育委員会																																
3 目 的	九州地区小学校・中学校・高等学校の英語教育に関する諸問題を研究し、小学校・中学校・高等学校の連携を強化するとともに、大学との連携を推進し、これからの教育振興を期する。																																	
4 大会テーマ	「 はぐくもう！未来の国際人！」 ～主体的・協働的な学びを通して、創造性豊かな人材を育てる英語教育～																																	
5 大会テーマ設定の理由	<p>社会の急速なグローバル化に伴い、国境を越えた異文化に対する理解と異文化間のコミュニケーション力は今後もますます重要になる。そのために、国際共通語である英語の運用能力向上は不可欠であり、今後の英語教育において、基礎的・基本的な知識・技能を土台に、主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、学びに向かう力を育成することは、子どもたちの将来には必要不可欠である。</p> <p>子どもたちが成長し、グローバル化した社会で真の国際人として活躍するためには、英語教育を通じて異文化への興味・関心を喚起し、発達段階に応じた言語活動により豊かな英語力を身につけることが何より重要である。新学習指導要領における小学校での英語教育の教科化を機会に、小、中、高の連携をさらに強化し、この九州の地からより多くの子どもたちが世界に羽ばたいていくことを願って本テーマを設定した。</p>																																	
6 期 日	平成30年10月19日（金）・20日（土）																																	
7 会 場	19日（金）メディキット県民文化センター 20日（土）①宮崎大学教育学部附属中学校 ②宮崎公立大学	演劇ホール・イベントホール 〒880-0031 宮崎市船塚3-2-10 〒880-0026 宮崎市花殿町7-67 〒880-0031 宮崎市船塚1-1-2																																
8 日 程	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">10月19日（金）</th> <th colspan="2">10月20日（土）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>受付</td><td>9:10- 9:40 (30)</td> <td>受付</td><td>9:00- 9:20 (20)</td> </tr> <tr> <td>開会行事</td><td>9:50-10:10 (20)</td> <td>分科会A</td><td>9:20-10:30 (70)</td> </tr> <tr> <td>公開授業（小学校）</td><td>10:25-11:10 (45)</td> <td>分科会B</td><td>10:50-12:00 (70)</td> </tr> <tr> <td>公開授業（中・高校）</td><td>11:30-12:20 (50)</td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>昼食</td><td>12:20-13:20 (60)</td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>授業合評会</td><td>13:20-14:45 (85)</td> <td></td><td></td> </tr> <tr> <td>基調講演</td><td>15:00-16:10 (70)</td> <td></td><td></td> </tr> </tbody> </table>		10月19日（金）		10月20日（土）		受付	9:10- 9:40 (30)	受付	9:00- 9:20 (20)	開会行事	9:50-10:10 (20)	分科会A	9:20-10:30 (70)	公開授業（小学校）	10:25-11:10 (45)	分科会B	10:50-12:00 (70)	公開授業（中・高校）	11:30-12:20 (50)			昼食	12:20-13:20 (60)			授業合評会	13:20-14:45 (85)			基調講演	15:00-16:10 (70)		
10月19日（金）		10月20日（土）																																
受付	9:10- 9:40 (30)	受付	9:00- 9:20 (20)																															
開会行事	9:50-10:10 (20)	分科会A	9:20-10:30 (70)																															
公開授業（小学校）	10:25-11:10 (45)	分科会B	10:50-12:00 (70)																															
公開授業（中・高校）	11:30-12:20 (50)																																	
昼食	12:20-13:20 (60)																																	
授業合評会	13:20-14:45 (85)																																	
基調講演	15:00-16:10 (70)																																	

9 公開授業者

小学校 の部	授業者 司会者 指導助言者	金丸 瞳子 岩切 宏樹 アダチ 徹子	宮崎市立西池小学校 宮崎市立赤江小学校 宮崎大学大学院教育学研究科	指導教諭 指導教諭 准教授
中学校 の部	授業者 司会者 指導助言者	小川 馨 田代 祥子 東條 弘子	宮崎市立生目南中学校 宮崎市立生目台中学校 宮崎大学教育学部	教諭 教諭 准教授
高等学校 の部	授業者 司会者 指導助言者	肥田木 洋之 渡会 康浩 長嶺 寿宣	宮崎県立高鍋高等学校 宮崎県立高鍋高等学校 熊本大学大学院人文社会科学研究部	教諭 主幹教諭 准教授

10 講演

講師	長嶺 寿宣 熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授
演題	小・中・高を貫く授業設計の観点 ～英語教育改革のピットフォールと対策の講じ方～

11 分科会テーマ・発表者一覧

	テーマ	校種	担当	発表者	所属
1	学習意欲を喚起し、基礎学力の定着を図る指導	A	高	牛島 大輔	大分鶴崎高等学校
		B	中	杉光いづみ	吉田中学校
2	読解力および聴解力を高める指導	A	中	沖縄 玉城 昇太	糸満中学校
		B	高	宮崎 村上 泰子	福島高等学校
3	Teaching Ideas to Improve Communication Skills	A	高	鹿児島 吉原 宇勇	大島高等学校
		B	中	宮崎 平川 由香 Christine Spiers	佐土原中学校
4	表現力を高める指導	A	中	長崎 荒木 美香	深江中学校
		B	高	沖縄 伊波志麻子	前原高等学校
5	望ましい小・中・高・大の連携	A	中	鹿児島 山下 里紗	伊敷中学校
		B	高	福岡 西里 勇希	輝翔館中等教育学校
6	コミュニケーション能力の育成をめざす指導	A	高	佐賀 宮西 紀生	鳥栖高等学校
		B	中	浜崎 勇太 大分 波多野 蘭	南部中学校
7	教育機器を活用した英語指導	A	中	熊本 益本 真裕	菊鹿中学校
		B	高	長崎 福岡 真理	鹿本中学校
8	効果的な評価やテストのあり方	A	高	熊本 近藤 栄作	長崎南高等学校
		B	中	福岡 堤 厚	第二高等学校
9	小学校における外国語・外国語活動の指導	A	小	宮崎 松崎 綾	第一中学校
		B	小	宮崎 齋藤 匡	三股西小学校

*Aは前半(分科会Ⅰ)、Bは後半(分科会Ⅱ)での実施。

*分科会3は、英語で実施。

分科会A（1A～9A分科会）一覧

2日目：9：20～10：30

1 A	校種 高校	担当県 大分	発表者 牛島 大輔	大分県立大分鶴崎高等学校
タイトル	カスケード式研修の実践とその成果と課題			
発表概要	中央研修を元にした教員指導力向上研修(カスケード式研修)の内容を勤務校の実態に合わせて活用・実施し、運用に関わる成果・課題を生徒の「学習意欲への影響」「基礎学力の定着」を検証する。新テストの初年度の対象となる1年生に対して研究を行い、表現力の育成手段改善のヒントを得ることができると考えている。			
2 A	校種 中学	担当県 沖縄	発表者 玉城 昇太	糸満市立糸満中学校
タイトル	スローラーナー(slow learners)の読解力・聴解力を育む授業実践～課題探索型アクション・リサーチを用いた授業改善～			
発表概要	本研究では、スローラーナーの読解力・聴解力の向上に焦点を合わせる。学習者の実態や課題を授業者の観察や学習者の振り返り、形式イレギュラーを通して把握し、課題を踏まえた授業改善を行った。実践を通じた学習者の変容をスキル面・情意面から報告する。			
3 A	校種 高校	担当県 鹿児島	発表者 吉原 宇勇	鹿児島県立大島高等学校
タイトル	Teaching Practice of Project-Based Learning in a Vocational High School			
発表概要	This section is about a teaching practice of PBL to develop students' 4Cs. The video exchange project was conducted online among 4 schools including Korean high schools. In addition, other small projects using textbooks will be shared as well as language activities which promote students' communication skills.			
4 A	校種 中学	担当県 長崎	発表者 荒木 美香	南島原市立深江中学校
タイトル	表現力を高める指導			
発表概要	話す力・書く力を高めるための取組について、南島原市全体で取り組んだ活動について紹介する。生徒のアンケートや学力調査の結果から本市の課題を把握し、課題解決に向けた取組を行い、成果や課題を分析する。			
5 A	校種 中学	担当県 鹿児島	発表者 山下 里紗	鹿児島市立伊敷中学校
タイトル	グローバル社会で生きる資質・能力を身に付けた生徒の育成～円滑な小中連携を通して、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善～			
発表概要	主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善として、小学校外国語活動との接続を意識した言語活動、主体的に学ぶ態度の育成、学校間の連携のあり方について、各学校の実践例をもとに研究発表を行います。			
6 A	校種 高校	担当県 佐賀	発表者 宮西 紀生・浜崎 勇太	佐賀県立鳥栖高等学校
タイトル	中高6年間を見据えた英語によるコミュニケーション能力の育成—CAN-DOリストとICTを活用したパフォーマンステストの研究を通して—			
発表概要	中高一貫校である本校において、CAN-DOリストの作成でその利点を十分に活かしきれていないという状況から、中高6年間を見据えたCAN-DOリストを作成し、最終到達目標を確認するためのパフォーマンステスト内容の共有を図る。またICTの活用により、日々の授業改善につなげ、コミュニケーション能力の育成をめざすこととした。			
7 A	校種 中学	担当県 熊本	発表者 益本 真裕・福岡 真理	山鹿市立菊鹿・鹿本中学校
タイトル	小中連携の視点を踏まえた豊かな表現力の育成を目指した授業の創造			
発表概要	CAN-DOリストの地域版を作成し、生徒と教師、教師と教師で学習到達目標の共有化を図った。学習到達目標を達成するための基礎的・基本的事項の確実な定着と達成感のある言語活動を目指して取り組んだ指導の実際と成果について報告する。			
8 A	校種 高校	担当県 熊本	発表者 堤 厚	熊本県立第二高等学校
タイトル	Moodleを使った音読の評価～課題と可能性～			
発表概要	第二高校で教育支援システムのMoodleを導入して約2年になる。ゼロからの出発であったが、情報科職員の支援もあり、なんとか動き始めた。実際の運用に関しては課題も多いのですが、それ以上にひろがるムードルの世界を垣間見たわくわく感が伝えられたら幸いです。			
9 A	校種 小学	担当県 宮崎	発表者 藤原 綾子	三股町立三股西小学校
タイトル	「小学校文化」に根差した外国語教育の推進～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫・改善を通して～			
発表概要	新学習指導要領実施に向けた移行期間に、教師はどのように指導力や英語力を向上させ、実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な力を児童に身に付けさせていけばよいのかを実践・検証する。本校の取組に加え、中学校区内の学校や行政との連携を含めた取組について発表を行う。			

分科会B（1B～9B分科会）一覧

2日目：10：50～12：00

1 B	校種 中学	担当県 佐賀	発表者 杉光 いづみ	嬉野市立吉田中学校
タイトル	伝え合うことを意識した表現活動の研究～プレゼンテーションとやり取りの実践を通して～			
発表概要	3年間のゴールを「発信者と受信者が、学んだことや経験を自分の考えと結びつけて互いに伝えあうことができる生徒の育成」と定めた。郷土についてのプレゼンテーション型授業や伝えあうことを意識した表現活動の実践について発表する。			
2 B	校種 高校	担当県 宮崎	発表者 村上 泰子	宮崎県立福島高等学校
タイトル	中高乗り入れ授業における生徒の学びを深めるためのTTの在り方			
発表概要	昨年度スタートした串間市立串間中学校と本校における連携型中高一貫教育の取組に関する報告を行う。学力向上と中高のスムーズな移行を目的に、中高双方の良さを生かす取組や学びを深める活動の成果について検証し、今後につなげたい。			
3 B	校種 中学	担当県 宮崎	発表者 平川 由香・Christine Spiers	宮崎市立佐土原中学校
タイトル	To Make Students Active Communicators			
発表概要	In order to develop the communication abilities of students, the classroom should be a place where a large number of high quality interactions take place. That is why we present language learning activities that have a conscious spirit of improvisation at our school's English department.			
4 B	校種 高校	担当県 沖縄	発表者 伊波 志麻子	沖縄県立前原高等学校
タイトル	表現力を高める指導～ファシリテーターとしての教師の役割～			
発表概要	ファシリテーターとしての教師の役割・対象生徒の特徴把握・効果的な授業形態やアクティビティ・訂正方法やフィードバックの方法・自立的な学習者に導く為の環境作り、など生徒の表現力を高める為の様々な工夫を紹介する。			
5 B	校種 高校	担当県 福岡	発表者 西里 勇希	福岡県立輝翔館中等教育学校
タイトル	「ICTを活用したアクティブラーニングにおける指導実践」～中学1年生から現在までの取り組みについて～			
発表概要	県内唯一の中等教育学校における英語科指導を紹介させて頂きます。中学から高校への入試がない場合の生徒のやる気をいかに高めるか等、日々の授業での指導の工夫について発表します。実際の生徒の授業風景等も動画で紹介しながら、本校での英語科指導の成果と今後の課題をお伝えします。			
6 B	校種 中学	担当県 大分	発表者 波多野 蘭	日田市立南部中学校
タイトル	ノートを使用したwriting活動の積み重ねによるoutputの工夫～相手意識を持ったプラス1活動～			
発表概要	筆活動やwritingノートを使って、自分のことや自分の学校、身近なこと（ふるさと・日本）を表現できるように、4技能のつながりを意識して取り組んだ実践を紹介します。			
7 B	校種 高校	担当県 長崎	発表者 近藤 栄作	長崎県立長崎南高等学校
タイトル	ICT機器の活用による発表活動での英語力向上～長崎南高等学校SSH事業の取り組みを通して～			
発表概要	本校は平成25年度よりSSH事業の指定を受け、未来を担う科学技術系人材を育成することをねらいとして、様々な取り組みを通して研究してきた。ICT機器の活用の事例を紹介し、また生徒の実態をアンケート結果等から考察し、今後のICT活用をいかに効果的に進めていくか発表する予定である。			
8 B	校種 中学	担当県 福岡	発表者 松崎 綾	飯塚市立第一中学校
タイトル	「21世紀型能力」育成の英語教育へのアプローチ～ループリックの活用を通して～			
発表概要	本校の英語教育では、「協調学習」における授業形態から、生徒の到達レベルを評価するためのループリックを作成し、高いレベルでの指導と評価の一体化を目指している。			
9 B	校種 小学	担当県 宮崎	発表者 齋藤 匠	宮崎大学教育学部附属小学校
タイトル	小学校外国語の特質に応じた学びの本質に迫る授業の創造～相手意識をもってかかわり、豊かに自己を表現しようとする子どもを育むための学習指導の工夫をとおして～			
発表概要	小学校外国語の学習で大切にしたいことは、コミュニケーションを図った先にある「その単元ならでは子どもの思いを共有させること」ではないだろうか。そのための学習指導の工夫をとおして学びの本質を探る。			

基調講演

演題 「小・中・高を貫く授業設計の観点」 ～英語教育改革のピットフォールと対策の講じ方～

講師：長嶺寿宣 氏

熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授

(1) 英語教育のこれまで

① ソウルオリンピックまでの韓国の英語教育

- ・英語教育に関して 1990 年までに様々な方法がなされてきた
- ・教師が「何かやらなければ」と思うときほど失敗する傾向にある⇒ピットフォール（落とし穴）
- ・1988 年「ソウルオリンピック」⇒それに向けて 1982 年に小学校英語試験的な導入が始まる
- ・1983 年入試改革⇒リスニングの導入
- ・1990 年代小学校英語の本格化
- ・1997 年小学校 3 年生から英語が必須科目へ
- ・韓国政府は教員の研修を小 120 時間、中高 125 時間をかけて行った。
- ・台湾は 300 時間の研修を教員に対して行っている。

② 家庭での英語格差

- ・教室で裕福な家庭の生徒が英語力をひけらかすようになる→そうでない子は劣等感を感じる。
- ・英語格差（English divide）→英語格差が社会格差の大きな要因になる
- ・TETE（Teaching English through English）2008 年からスタート
⇒生徒が理解できない英語は無意味
- ・小中でモチベーションがないとだめ
- ・生徒指導や信頼構築には母国語が必須 → 目的に応じた使い分けが必須
- ・だからこそ、小・中・高のクラスルームイングリッシュの使い分け・見直しが必要
⇒言いつぱなしではなく心が動くような工夫・意味をしっかりと考えさせることが必要

③ マレーシアでの取り組み

- ・2007 年：マレーシアで数学と化学を英語で授業をしたら、二教科の学力が低下
→英語を使って教えたことが原因

(2) 6つのピットフォールとその対策…ピットフォール（落とし穴）

① 音声重視の小学校英語

- ・Small Talk：小学校 5 年生で児童と教師が話せるようにすることを目標にしている。
→中学・高校でのつながりが見られない
- ・音素認識の重要性：なぜ大事か⇒読み書きに影響してくる。
(音声で間違っていたら、書くときにも間違う ex What / What's)

② スピーキングの技能 話す準備ができていないのに、書かせる

- ・「言いたいことを書きなさい」になると writing → reading になる
- ・話す活動と書く活動は分けて、書く活動はまとめ
- ・視聴覚の情報も必要

③ 言語活動の目的

- ・「言語活動」をすることが目的ではなく、言語活動をする「目的」が必要
例) 「自己紹介」→「自分をとても好きになってもらえるような自己紹介」
→「面接で合格するような自己紹介」

④ 主体的・対話的で深い学び Active Learning

- ・もっと書きたい、もっと読みたい、もっと話したい、もっと聞きたいと思える子どもをどれだけ中学校に送り出すか。
- ・日本語の思考力が高まっていても、英語の能力とマッチしない。→日本語を変えないと、英語にできない。「中間日本語」を考える時間が必要。英語にできるチャンスを見逃さないように。

⑤ 「即興性」と「創造性」

- ・Classroom English を見直す。英語の後に日本語を話すのをやめましょう。
- ・徐々に Classroom English を意図的に増やし、子供たちが気付いたらいつの間にか英語の授業になっていたというのが理想。
- ・即興性で言葉を繰り返すと「形式化」になり、「What color is summer?」というように言語を通して思考していくような工夫を取り入れる。小学校英語が入ってくることによって、言葉が創造的に言葉を利用する力をもつ。文法形式にとらわれると削がれてしまう部分も増える。

⑥ 文法は「形式」・「意味」・「使用」

- ・use :「使用」の部分が抜け落ちる事が多い。
(例1) Anything と Something の違い
- ・言語には意図や状況が絡んでいる。
- ・生徒に使わせるために、その感覚を身に付ける教材研究が必要。
(例2) Do you have any idea? と Do you have any ideas?
- ・ニュアンスが違う。
- ・使用するためには英英辞典等で意味を確認し、教材研究のあり方と英語力の向上が必要。

(3) まとめ

- ・英語という教科を通して、人格形成が必要。
- ・自己肯定感を積み上げていって、パフォーマンス評価を行い、授業改善を行ってほしい。
- ・ピットフォールを避けていってほしい。

第66回 九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会） 基調講演講師プロフィール

【 講師 】 長嶺 寿宣（ながみね としのぶ）

熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授

【 演題 】 小・中・高を貫く授業設計の観点

～英語教育改革のピットフォールと対策の講じ方～

【 略歴 】 宮崎県出身。1997年宮崎公立大学人文学部卒業。2000年ケンタッキー州立マーレイ大学大学院修士課程修了。2007年ペンシルベニア州立インディアナ大学大学院博士課程にて博士号を取得。ペンシルベニア州立インディアナ大学文学部専任講師、宮崎市立東大宮中学校講師、国立八代工業高等専門学校講師、熊本県立大学文学部・大学院文学研究科准教授、熊本大学教育学部・大学院教育学研究科准教授等を経て、平成30年4月より現職。熊本大学教職大学院兼担当教員。熊本県立大学兼任講師。龍谷大学アフリシア多文化社会研究センター客員研究員。大学英語教育学会(JACET) SIG言語教師認知研究会代表。小学校英語教育学会(JES)熊本県理事。文部科学省中学校検定教科書 *New Horizon English Course 1-3*(東京書籍)編集委員。

【 専門 】 英語教授法・応用言語学を専門とし、主に応用音声学、言語教師の認知・情動、リフレクティブ・プラクティス、英語教員養成、外国語教育政策の研究に従事。競争的資金等による研究課題、書籍等出版物、研究論文、講演・口頭発表等の情報は researchmap 研究者データベース（国立情報学研究所；<https://researchmap.jp/>）に掲載。

公開授業（小学校）学習指導案

平成30年10月19日（金）
 宮崎市立西池小学校
 6年1組（男子20名 女子20名）
 指導者 指導教諭 金丸 瞳子
 FLAA COLLEEN YOKOYAMA

1 単元名 Unit 5 My Summer Vacation 夏休みの思い出 （小学校外国語教材『We can ! 2』）

2 単元目標

- 夏休みの思い出について、進んで伝え合おうとする。（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）
- 夏休みに行った場所や食べた物、楽しんだこと、感想などを表す表現に慣れ親しむ。また、夏休みの思い出について簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、例を参考に書いたりすることに慣れ親しむ。
（外国語への慣れ親しみ）
- 英語の書き方の規則に気付く。
（言語や文化に関する気付き）

3 学習指導要領における領域別目標

聞くこと	ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えようとする。
読むこと	イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味を分かろうとする。
話すこと (やり取り)	イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合おうとする。
書くこと	イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書こうとする。

4 言語材料

- I went to (my grandparents' place). It was (fun). I enjoyed (fishing). It was (exciting). I saw (the blue sea). It was (beautiful).
- grandparent vacation 動詞の過去形(went, ate, saw, enjoyed, was) 自然(beach, mountain, sea, lake, river) 動作(hiking, camping, fishing)（既出表現・語彙）I'm from (Shizuoka). I [like/play] (soccer). my it スポーツ 食べ物 季節 動作 身の回りの物 状態や気持ちを表す語

5 指導観

- 本単元は、過去の表現を用いて夏休みに行った場所やそこで楽しんだこと、感想などについて伝え合ったり、それらについて書かれたものを読もうとしたり、話したことを書こうとしたりすることを目標とする。夏休みは、学校では経験できないことができる期間である。夏休みの思い出を題材とすること

は、児童にとって聞いたり話したりする必然性があり、学習指導要領の目標にも合致している。

夏休みの思い出について伝え合う言語活動では、過去形を自然に活用できる。なお、過去の表現は初出であり、児童にとって難易度が高くならないよう、言語材料として扱う動詞の過去形は、*went, ate, saw, enjoyed, was* に限定する。単元の指導にあたっては、「聞くこと」「話すこと」の言語活動に取り組み、語句や表現に音声で慣れ親しませた後、「読むこと」「書くこと」を毎時間少しづつ慣れ親しませていく。このような学習をとおして、児童に自己を表現し相手を理解する喜びや、相手と関わり共感し合う楽しさを実感させていきたい。さらに、夏休みの思い出に関する様々な体験を話したり聞いたりすることは、それぞれの地域のすばらしさや文化に関する理解を深める上でも意義深い。

- 本学級の児童 40 名は、本年度から年間 70 時間の移行期間の指導計画に沿って外国語活動の学習を進めている。教師や外国語活動アシスタントの説明や発問、指示などを真剣に聞いて、友だちと楽しく学ぼうとする姿が見られる。これまでの学習では、音声教材を生かしながら、単元で学習する基本的なコミュニケーションをとおして楽しく英語を学ぶことができた。新教材を用いた「読むこと」「書くこと」の学習は、今回が初めてである。

これまでの指導では、コミュニケーション能力の育成を目指して、英語のリズムやイントネーションに慣れ親しむためにチャンツを繰り返し行い、カードや I C T 等の教材・教具の工夫をし、ペアやグループによる学習を取り入れることで、意欲的に活動し会話を続けることができるようになってきている。また、「アイコンタクト」「クリアボイス」「スマイル」「ジェスチャー」というコミュニケーションの 4 つのポイントを明確にして取り組ませ、相手の言葉に簡単なリアクションができることを目指して活動に取り組んできた。これらを意識して活動に取り組ませることで、意外な話題に出会った時“Amazing!”と反応するなど少しづつ相手に自分の気持ちが伝わるコミュニケーションができるようになりつつある。

- そこで本単元の指導に当たっては、児童が新教材の内容に負担感をもたず意欲的に取り組めるように、「We can! 2」のワードボックスの中の夏休みに関連する簡単で基本的な語句を中心に指導する。それらの語句を用いて、夏休みの思い出について自分の考えや気持ちを伝え合ったり、語順を意識しながら書いたりさせていきたい。また、一人一人の夏休みの思い出についてアンケートなどで記録を残しておくことで、英語で表現する際の資料とさせたい。単元は、①過去のことを表す表現に出会う、②登場人物が夏休みにしたことを見たり話したりする、③登場人物の夏休みを参考に、自分の夏休みについて友だちと伝え合う、④相手意識をもって自分の夏休みを紹介する、の流れとする。この計画に沿って、単元の最終に 5 年生に自分の夏休みの思い出を伝えることを目標にして指導を進める。

本時は、外国語教育推進教員と FLAA（外国語活動アシスタント）との TT で行い、それぞれの役割を生かして指導する。初めに、Summer Vacation をテーマにスマルトトークやチャンツを行い、学習のねらいをしっかりとさせる。次に Let's Listen3 で、英語の音声を聞かせる。音声には行った場所がぬいてあるので、児童と英語のやり取りをしながらどこへ行ったかを誌面の絵から推測させる。また Let's Talk では、今まで学習したことをもとに夏休みの思い出についてペアで伝え合い、英語でのコミュニケーションに慣れ親しませる。その際、途中でコミュニケーションの振り返りを行うことで、相手に思いが伝わる話し方・聞き方のポイントについて確認し、最終活動に向けて一人一人の活動を確かなものにしていきたい。最後に本時のねらいに照らして振り返りをすることで、次時に繋げたい。

6 単元計画（全8時間 本時7／8）

時	目標(◆)と主な活動(【 】、○) ※【 】=誌面化されている活動	◎評価〈方法〉
	◆夏休みに行った場所を言ったり聞いたりしようとする。	
1	○Small Talk 話題：夏の食べ物 【Let's Listen①】話の内容に合うように誌面上の絵を線で結ぶ。 【Let's Play】ポインティングゲーム（①個人②ペア） ○Let's Play 夏休みに行った場所をペアで伝え合う。 ○Let's Read and Write 書く文例：I went to (the sea).	◎I went to ~. を使って夏休みに行った場所を言ったり聞いたりすることができる。 〈行動観察〉
	◆夏休みの思い出についての話を聞き、行った場所や感想などを分かろうとする。 ◆過去の表現の仕方が分かり、夏休みに行った場所とその感想を伝え合おうとする。	
2	【Let's Play】ポインティングゲーム（①個人②ペア） 【Let's Watch and Think①】「何をしたのかな」 ○Let's Play フェイントリピートゲーム…感想を表す形容詞 ○Let's Talk 夏休みに行った場所とその感想をペアで話し合う。 ○Let's Read and Write 書く文例：I went to ~. It was ~.	◎I went to ~. It was ~.などを使って、夏休みに行った場所とその感想について伝え合っている。〈行動観察〉
	◆過去の表現の仕方が分かり、夏休みに行った場所とその感想を伝え合おうとする。	
3	○Small Talk 話題：夏休みの思い出（行った場所・感想） 【Let's Chant】Summer Vacation ○Let's Talk グループで、順に夏休みに行った場所を話していく。 【Let's Play】ポインティングゲーム（①個人②ペア） ○Let's Read and Write 書く文例：I went to ~. It was ~.	◎I went to ~. It was ~.などを使って、夏休みに行った場所とその感想について伝え合っている。〈行動観察〉
	◆夏休みに行った場所と食べた物、その感想を言ったり聞いたりしようとする。	
4	【Let's Chant】Summer Vacation 【Let's Listen②】話の内容に合うように誌面上の絵を線で結ぶ。 ○Let's Play 昨夜か今朝食べた物を、ペアで伝え合う。 ○Let's Talk 夏休みに行った場所と食べた物、感想について話す。 ○Let's Read and Write 書く文例：I ate ~. It was ~.	◎I went to ~. I ate ~. It was ~. を使って、夏休みに行った場所と食べた物、その感想を言ったり聞いたりしようとする。〈行動観察〉
	◆夏休みに楽しんだこととその感想を言ったり聞いたりしようとする。	
5	○Small Talk 話題：夏休みの思い出（行った場所・食べた物・感想） 【Let's Watch and Think②】映像を視聴し分かったことを記入する。 ○Let's Play マッチングゲーム ペアでカードの意味を合わせる。 ○Let's Play ペアで夏休みにしたことと言い合う。 ○Let's Read and Write 書く文例：I enjoyed ~. It was ~.	◎I went to ~. I enjoyed ~. It was ~. を使って、夏休みに楽しんだこととその感想を言ったり聞いたりしようとする。〈行動観察〉

	<p>◆夏休みの思い出についての話を聞き、行った場所、楽しんだこと、食べた物、感想を分かろうとする。</p> <p>◆過去の表現の仕方が分かり、夏休みに行った場所、楽しんだこと、食べた物、その感想について伝え合おうとする。</p>	
6	<p>○Small Talk 話題：行きたい場所 ○Let's Play カード・ディスティニー・ゲーム 3人で行う。 【Let's Read and Write】夏休みの思い出について、行った場所・食べた物・したことなどワークシートに書き写した文を書き、その文を読む。 ○Let's Talk 夏休みの思い出に関して、「行った場所」「楽しんだこと」「食べた物」「感想」についてペアで話す。</p>	<p>○I enjoyed -ing. I ate ~. などを使って、夏休みに楽しんだことや食べた物について伝え合おうとしている。〈行動観察〉</p>
7 （ 本 時 ）	<p>◆夏休みの思い出について、思いが伝わるように話したり聞いたりしようとする。</p> <p>○Small Talk 話題：夏の食べ物 【Let's Chant】Summer Vacation 【Let's Listen③】話の内容に合うように誌面上の絵を線で結ぶ。 ○Let's Talk 夏休みの思い出に関して、「行った場所」「楽しんだこと」「食べた物」「感想」について、思いが伝わるようにペアで話す。 ○コミュニケーションの振り返りを行い、気を付ける点を確認する。</p>	<p>○I went to ~. I ate ~. I enjoyed -ing. It was ~.などを使って、夏休みの思い出について思いが伝わるように話したり聞いたりしている。〈行動観察〉</p>
8	<p>◆夏休みの思い出について話したことを、今まで学習してきたことを参考にしながら、5年生に伝えようとする。</p> <p>【Activity】グループに分かれて、夏休みの思い出について思いが伝わるように5年生に伝える。 【単元の振り返り】夏休みの思い出の発表の中で、よかったです、その理由等を発表する。</p>	<p>○夏休みの思い出について話したことを、今まで学習してきたことを参考にしながら、5年生に伝えようとしている。 〈行動観察・記述観察〉</p>

7 本時の目標

- 夏休みの思い出について、相手に思いが伝わるように話したり、それを聞いたりしようとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度) (外国語への慣れ親しみ)

8 学習指導過程

時間	児童の活動	主な学習活動及び学習内容 ◎評価〈方法〉	準備物
2分	・あいさつをする。	・英語であいさつし、学習する雰囲気を盛り上げる。	
8分	Small Talk ・本時のめあてを確認する。 【Let's Chant】	・夏の食べ物について、教師と講師の Small Talk を聞かせ、ペアで Small Talk をさせる。 夏休みの思い出について、相手に思いが伝わるように話したり、それを聞いたりしよう。 ・夏休みの思い出についてチャンツをし、英語のリズムやイントネーションに慣れさせる。 ・行った場所、したこと、食べた物にリアクションを加えて、2つに分かれてチャンツを行う。	写真 リズム ボック ス
10分	【Let's Listen③】 ・英語の音声を聞き、登場人物が夏休みの思い出について話しているのを聞いて、どこへ行ったかを考えて、誌面の絵から選ぶ。 ①7つの場所名を確認する。 ②登場人物の名前を確認する。 ③Let's Listen③の問題を聞く。 ④行った場所と感想を聞いて、誰がどこへ行ったかを推測する。 ⑤したことと感想を聞いて、誰がどこへ行ったかを推測する。 ⑥食べた物と感想を聞いて、登場人物と言った場所を線で結ぶ。	・登場人物4人が、ある場所に行っていたこと、食べた物、その感想を話し、どこに行ったかクイズを出している英語の音声を聞かせる。 ・今まで学習したことを参考にしながら、「したこと」「食べた物」「感想」をヒントにどこへ行ったかを推測させる。 ・少しずつ聞かせることで、一人一人に推測を促す。	デジタル教材
	<p>A: I went to xxx. It was beautiful. I enjoyed swimming. It was fun. I ate shaved ice. It was cold.</p> <p>B: I went to xxx. It was wonderful. I enjoyed shopping. It was fun. I ate pizza. It was nice.</p> <p>C: I went to xxx. It was beautiful. I enjoyed fishing. It was exciting. I ate obento. It was delicious.</p> <p>D: I went to xxx. It was great. I enjoyed riding a roller coaster. It was exciting. I ate hamburger. It was good.</p>		
	<p>◎ 夏休みの思い出についての話を聞き、内容に合う絵を選ぶことができる。 <行動観察></p>		
20分	○Let's Talk ・夏休みの思い出に関して、「いった場所」「楽しんだこと」「食べた物」「感想」のいずれかについて、誌面を参考にしてペアで話す。	・コミュニケーションのポイントとして「アイコンタクト」「クリアボイス」「スマイル」「ジェスチャー」「リアクション」を意識しながら、楽しくコミュニケーションに取り組ませる。 ・視覚的な支援として「夏休みの絵」を活用しながら、相手に伝わる話し方をさせる。	夏休みの絵

	<ul style="list-style-type: none"> 今まで会話していない人と会話をする。 ①教師と講師のデモンストレーションを聞く。 ②相手に思いを伝えるようにするにはどうすればよいか考える。 ③横のペアで対話をする。 ④振り返りを行い、話し方・聞き方のポイントを確認する。 ⑤ペアを替えて対話をする。 ⑥代表のペアの発表を聞く。 ⑦教師のまとめを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 「間を取る」「指さす」「強調する」「Do you like ~?と尋ねる」等で、相手に思いを伝える工夫をさせる。 最初の対話が終了したところで振り返りを取り入れることで、相手に思いが伝わるコミュニケーションができているか確認させる。 よりよいコミュニケーションがあれば全体に紹介し、一人一人の思いを伝える意欲を高めていく。 取組の中から特に良かった点を紹介しまとめを行う。 ◎ 話し手… I enjoyed -ing. や I ate ~.などを使って、夏休みに楽しんだことや食べた物について伝えようとしている。 <行動観察> ◎ 聴き手…相手の発表に対して、自分の思いを簡単なりアクションで伝えようとしている。 <行動観察> 	
5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の活動を振り返り、振り返りカードに記入する。 あいさつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の学習で気付いたことや学んだ事を振り返りカードに記入させる。 ねらいに照らして良かった点を見付け、児童を称賛する。 次時の学習について話し、意欲をもたせる。 あいさつをし、最終活動へ繋げる。 	振り返りカード

授業者振り返り

- ・物怖じせず、堂々と自分の言葉で思いを伝え、外国の方と協力して課題解決ができる児童にしたい。
- ・未来の国際人を外国語の授業の中で育むために、本日の授業では次の4つのこと意識した。
 - ①他者への配慮を促すための場面設定をする：単元の最終活動を「5年生に夏休みの思い出を伝える」とすることで課題意識を持たせた。
 - ②相手意識をもたせてやりとりをする：座席を変え、違う相手と会話をする楽しさを感じさせた。
 - ③友達の意見を聴いて即興で反応する：相手に合わせてリアクションができるように指導してきた。
 - ④児童の主体的な学びを促すようにする：振り返りカードの4観点の自己評価を活用し、児童の意見を紹介することで、主体的・協働的な学びを意識させることができた。

質 疑 応 答

Q1. 児童が本時に上手に発表できるようになるまでの指導過程はどういったものか。

A1: 児童に慣れ親しませたい語句や表現を1時間ごとに無理なく焦点化して、丁寧に指導してきた。
外国人講師の協力を得て、自然な会話になるように指導してきた。

Q2. 児童のリアクション表現の上達のために、日常的にどのような働きかけをしているのか。

A2. 教室英語の継続使用や、ガイドブックの表現をスマートトークやレッツトークで積み重ねている。

Q3. 児童がどのようにチャンツに慣れてきたのか？

A3. 児童に少しずつ、リズムとイントネーションを体感させてきた。さらに、児童に使ってほしいリアクションを入れたオリジナルのチャンツも作成している。

Q4. 児童に過去形 went をどのように導入したのか。

A4. 文法的に教えずに、明らかに過去と分かる場面設定の英文で、児童に went の意味を推測させた。

Q5. レッツトークの原稿はどのように作らせたのか。

A5. レッツトークのための原稿は書かせていない。レッツトークは書いて、読む活動ではなく、話す活動である。しかし、書く活動として、文科省のワークシートを用いて、児童が音声で慣れ親しんだものを、1時間1程度を例を参考にして書き写つせたりして、書きためる活動には取り組んだ。

Q6. 定冠詞の間違い I went to the Tokyo の訂正是不要だったのか。

A6. 小学校段階での目的は自分の言葉で自分の思いを伝えることなので、現段階では不要であったと考える。

指 導 助 言

《指導助言者：宮崎大学大学院教育学研究科 アダチ 徹子 准教授》

- ・ 本大会において、初めて小学校の公開授業が行われたことは大変意義がある。英語教育のスタートとなる小学校でのねらい「英語に出会って、自分の思いを伝えること」を小・中・高の先生で共有する良い機会となった。
- ・ 金丸教諭の英語が好きという思いが授業の根底にあった。児童に何かを好きになってもらうには、まず先生の好きという思いが大事である。小学校全体でたくさんの「好き」が共有されるとよい。また、専科だからできる授業として捉えるのではなく、学級担任としての学級経営や授業作りがあっての本日の授業であることも忘れてはいけない。

公開授業（中学校）学習指導案

平成30年10月19日（金）
宮崎市立生目南中学校
2年1組（男子15名 女子9名）
指導者 教諭 小川 馨

1 単元名 Program 6 A Work Experience Program （開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2）

2 単元の目標

- (1) 既習表現及び to 不定詞の 3 用法（名詞的用法・副詞的用法・形容詞的用法）を用いた言語活動において、仲間との学び合いを通して、間違いを恐れず英語で主体的にコミュニケーションを図ることができる。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- (2) to 不定詞の 3 用法を含む英文の正しい語順と使い方に関する知識を身に付け、自分の心情や行為の目的を他者に伝え、相互に意見交換をすることができる。
(外国語表現の能力)
- (3) to 不定詞の 3 用法を含む英文を聞く活動及び読む活動を通して、英文全体の概要を適切に捉えることができる。
(外国語理解の能力)
- (4) 新出文法事項に関する知識を活用し、職場体験学習の話題に基づき、自分の将来の夢や生き方等について仲間と英語で伝え合い情報を共有することができる。
(言語や文化についての知識・理解)

◎ 「CAN-DO リスト」に基づく学習到達目標（第2学年）

聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
・教科書の記述程度の、まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ることができる。	・聞いたり読んだりしたことについて、英語で自分の考えや気持ちを述べることができる。	・英語で表された話や対話の内容及び書き手の意見等を、正しく読み取ることができる。	・自分の考えや気持ち等を、英語を用いてわかりやすく書き、読み手に伝えることができる。

3 単元について

(1) 教材観

本単元の指導内容は、中学校学習指導要領（平成20年3月公示）第2章 第9節外国語科 2 内容（3）言語材料 エ 文法事項」の（力）to 不定詞に基づいて構成されている。

言語材料は、to 不定詞の 3 用法（名詞的用法・副詞的用法・形容詞的用法）を扱う。自分のしたことや行為の目的を仲間に伝え、情報の共有および意見の交換ができることが求められる。

単元の本文では、登場人物がそれぞれの職場体験学習を通して学んだことや感じたことを伝え合う場面が設定されている。なかでも、自分の将来の夢や希望を扱う場面は、My Project 5「スピーチをしよう - こんな人になりたい」での自己表現活動と接続しており、学習の振り返りとなる。自分

の将来の夢をふまえて職場体験学習について英語で意見交換をするという本単元の内容は、12月に実際に職場体験学習を控えた本校の生徒たちにとって興味深い題材となろう。自分のしたいことや好きなこと、行為の目的等を **to 不定詞** の3用法を使って表現することにより、生徒は自身による既知の英語表現の幅を広げ、仲間とのコミュニケーションを主体的に図る機会を得ることができると考えられる。

(2) 生徒観

本学級の生徒は素直であり、落ち着いた雰囲気の中、前向きに授業に取り組んでいる。自ら学ぶ意欲も旺盛で、英語によるコミュニケーションを楽しむ様子も見られる。一方、英文の正しい語順や語彙が十分に定着していない生徒や、級友の前で英語を用いて自分の考えを表現することに不安を感じている生徒もいる。本年4月に実施した教研式標準学力検査では、「適切な表現を用いて書く」ことが全国平均の正答率を下回った。また、同様に4月に実施した英語の授業に関するアンケートで、60%の生徒が「ペアやグループ内で英語で伝え合うことに抵抗を感じる」と回答している。これらの実態を克服するために、今年度は学習課題に応じてペアやグループで生徒同士が学び合う協働学習を取り入れ実践している。その結果として、7月に実施した同様のアンケートでは、「ペアやグループ内で英語で伝え合うことに抵抗を感じる」と回答した生徒の割合は40%に減少した。しかし、同じく7月に *SUNSHINE ENGLISH COURSE 2* の付録にある『英語で「できるようになったこと』リスト』を用いて生徒に自己評価をさせたところ、「教科書やモデルを参考にして将来の夢のスピーチ原稿を書く」ことに対して、60%の生徒が苦手意識をもっていることが分かった。

(3) 指導観

本単元の指導にあたっては、教科書の本文の内容理解に加えて、職場体験学習の事前と事後を場面として設定した言語活動を展開する。生徒の既存知をふまえ、新出文法事項を活用させることで、自分の心情や行為の目的を英語で具体的に表現できるように指導する。ここでは **My Project 5** 「スピーチをしよう－こんな人になりたい」で行う自己表現活動と円滑な接続を促す最初の段階としての単元指導を志向したい。本単元の言語材料である **to 不定詞** は、「**to + 動詞の原形**」という比較的単純な言語形式を有する一方で、3つの用法の理解に困難を示す生徒も少なくない。したがって、既習の動詞を用い、生徒が間違いを恐れずに英語で言語活動を積極的に行うことができるよう、ペアやグループでの協働を促し生徒同士の学び合いの機会を創出したい。本時の指導にあたっては、冒頭のスモールトークを通して既習の文法事項の復習を行い、その内容を発展させ、**to 不定詞** の副詞的用法を導入する。職場体験学習の目的やスローガンをグループで考えさせるタスク活動では、**to 不定詞** の副詞的用法に関する理解の定着を図る。さらに、仲間との学び合いや、他者とのやりとりを通して、的確な英語表現を用いて主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と言語活動の活性化を目指す。他者との意見交流を通し、生徒自身による思考を吟味させ、相対化させ、より洗練されることにつながり得る深い学びを実現させたい。

(4) 本単元の評価規準

単元（題材）	評価規準			
	ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
新出語彙や新出文法項目であるto不定詞の3用法（名詞的用法・副詞的用法・形容詞的用法）を使ってコミュニケーションを図る。	既習表現及びto不定詞の3用法（名詞的用法・副詞的用法・形容詞的用法）を用いた言語活動において、仲間との学び合いを通して、間違いを恐れず英語で主体的にコミュニケーションを図ることができる。	to不定詞の3用法を含む英文の正しい語順と使い方に関する知識を身に付け、自分の心情や行為の目的を他人に伝え、円滑に意見交換をすることができる。	to不定詞の3用法を含む英文を聞く活動及び読む活動を通して英文全体の概要を適切に捉えることができる。	to不定詞の3用法を含む英文の正しい語順と使い方に関する知識を身に付け、職場体験学習の話題に基づき、自分の将来の夢や生き方等について仲間と英語で伝え合い情報を共有することができる。

(5) 本単元の活動計画（7時間）

時	主な学習活動	評価規準				評価方法
		ア	イ	ウ	エ	
1	・to不定詞の名詞的用法を用いた英文の意味・構造を理解する。	○	○		○	ワークシート観察
2	・セクション1を読み、to不定詞の名詞的用法を理解する。 ・本文の内容を理解する。			○	○	ワークシート小テスト
3 【本時】	・to不定詞の副詞的用法を用いた英文の意味・構造を理解する。	○	○		○	ワークシート観察
4	・セクション2を読み、to不定詞の副詞的用法を理解する。 ・本文の内容を理解する。			○	○	ワークシート小テスト
5	・to不定詞の形容詞的用法を用いた文の意味・構造を理解する。	○	○		○	ワークシート観察
6	・セクション3を読み、to不定詞の形容詞的用法を理解する。 ・本文の内容を理解する。			○	○	ワークシート小テスト
7	・to不定詞の3用法のまとめと総復習を行う。 ・to不定詞の3用法を活用して自分の将来の夢や生き方について発表する。	○	○	○	○	発表チェック

4 本時の学習

(1) 本時の目標

- 仲間との学び合いを通して、間違いを恐れず英語で主体的にコミュニケーションを図ることができる。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- to 不定詞の副詞的用法を用いて自分の考え方や気持ちを英語で書き、他者に伝えることができる。
(外国語表現の能力)

(2) 資料及び準備

ワークシート、PC、ホワイトボード、辞書、電子辞書

(3) 指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点 ☆評価の視点 [評価方法]
<p>1 あいさつ・スマートトークをする。</p> <p>(1) 簡単なあいさつをペアで行う。</p> <p>(2) 教師のスマートトークを聞く。</p> <p>Look at this screen. This is our school, “Ikime-Minami Junior High School.” Why am I introducing our school now? Because we are not having our today’s lesson there. We are now in Medikit Art Center. Why are we here? Because we are here and show people our English lesson. Do you miss your school? Do you want to go back to your school? I am nervous now, so I want to go back to our school. By the way, I have a big question. “Why do you go to school?” Please talk with your partners.</p> <p>(3) ペアで対話する。</p> <p>S1: Why do you go to school?</p> <p>S2: Because I want to talk with my friends.</p> <p>Do you like to talk with your friends?</p> <p>S1: Yes. And I want to play basketball.</p> <p>(4) 全体で対話の内容を共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語学習の雰囲気をつくるために、英語で挨拶をし、身近な話題を用いてテンポよく生徒と対話する。 ・ 既習表現を用いて、本時の新出表現に結びつけることができるよう、「学校に行く」目的について考えさせる。 ・ 生徒が問い合わせの意図を掴み、話題についてのイメージを膨らませることができるよう、学校や学校行事の写真を見せる。 ・ 間違いを恐れず、積極的に対話を続けるように支援する。 ・ Small Talk の内容について全体で共有するために複数のペアに発表させる。 ・ 生徒の発話をもとに、語・句・文の単位を意識させ、新出表現に移行しながら生徒が自身の思考を英語で表現できるように指導し助言する。

<p>2 不定詞の副詞的用法を理解する。</p> <p>Because I want to study. We go to school to study. We go to school to get a job.</p> <p>(1) ペアで用法の違いを確認する。 (2) グループ・全体で確認する。 (3) 教師の説明を聞く。</p> <p>3 本時のめあてを確認する。</p> <p>職場体験学習のスローガンを考えよう！ Let's _____ to _____ !</p> <p>4 職場体験において各事業所に行く目的や何のために職場体験があるのかを考える。</p> <p>A We go to _____ to _____. B We study there to _____. C We have our work experience to _____.</p> <p>(1) 個人の考えをワークシートに記入する。 (2) 全体で意見を共有する。 (3) 自分の考えを修正したり、付け加えたりする。 (4) ホワイトボードを用いて C の部分を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 既習の文法事項である名詞的用法との違いに気付かせことができるように、対比しながら板書する。 ペアで対話をする場を設け、生徒自身が用法の違いに気付くことができるよう促す。 ペア・グループ内における積極的な会話への参加を促す。 生徒が用法の違いをグループや全体に説明することで協働的な学びを促す。 ゴールイメージを掴むことができるように、めあてを提示し、全体で確認をする。 スローガンのイメージを掴むことができるように、これまでの学校行事（体育大会等）のスローガンを想起させる。 机間指導を行い、生徒の思考を重んじ、適切な英語を用いて自己表現が可能になるように、助言する。 協力しながら個の学びを促進することができるように、グループや全体において、口頭で意見を表明する場を設け、生徒の発言を板書する。 仲間の意見を聞き、協力しながら生徒が自身の回答を修正したり確認したりすることができるように、個人やグループで自分の考えをワークシートに整理する時間を設ける。 机間指導を行い、スローガンにつながる意見が出るよう助言する。 協力しながら多様な意見に触れ、個の学びを深めができるよう、複数のグループから学級全体に対し、小ホワイトボードを用いて口頭で発表する場を設ける。 <p>☆ to 不定詞の副詞的用法を用いて、自分やグループの考えを英語で説明できる。 [観察・ワークシート]</p>
---	--

<p>5 職場体験のスローガンを考える。</p> <p>(1) グループでスローガンを考える。 (2) ホワイトボードに意見を書く。 (3) 全体で意見を共有する。</p> <p>Let's work hard to learn from our experience. Let's have our work experience to find our dream! We want to do our best.</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに作成した英文を参考にして、スローガンを作るように指示する。スローガンの作成が終わったグループには、その理由や職場体験の意気込み等を付け加え、まとまりのある英文にするように助言する。 ・グループで考えた意見を全体で共有できるように、小ホワイトボードにスローガンを書くように指示する。 ・小ホワイトボードを用いて発表できるように、ホワイトボードに提示する。 <p>☆ to 不定詞の副詞的用法を用いて、自分やグループの考えを英語で書いて説明できる。</p> <p style="text-align: right;">〔観察・ホワイトボード〕</p>
<p>6 本時のまとめを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ to 不定詞の副詞的用法についてペアで理解の確認をしたり、名詞的用法との相違について話し合った後に、各自がまとめるように指示する。

授業者振り返り

- ・自分は緊張していたが、生徒たちはリラックスしていて、いつもの活発な様子が見られた。
- ・これまでの流れをもとに、今日の一時間は生徒たちに託した。
- ・生徒たちの中から、表現したいことが出で、それを英文にすることができていた。
- ・まだまだ正確性はないので、これから少しづつ力をつけていきたい。

質 疑 応 答

- Q1. ライティングの時間が多いうように感じた。小学校では、新出の表現に十分慣れ親しんでから書くようしているが、中学校ではどうなのか。
- A1. 今日の授業はライティングを中心に行い、to の後に動詞の原形がくるというところを、しっかりと定着をしっかりさせたかった。毎回ライティングばかりというわけではない。
- Q2. 今回のタスクは非常に難しいように感じたが、毎回このようなタスクを与えているのか。もっと身近なトピックのほうがいいのではないか？
- A2. 協働の場合は、グループメンバーが4人いることでいろいろな考えができる。簡単なタスクではすぐに答えが出てしまい、深まらない。最初にビッグクエスチョンを与えて、さまざまな意見を引き出すことをしている。
- Q3. ホワイトボードに記入したスローガンの文法上の間違いを訂正する必要はなかったのか。するとすれば、どのようにするのか。
- A3. 今日の授業では、活動中にミスに気付かせようとしたが、結局自分たちでは訂正することができていなかった。授業中に私から訂正はしなかったが、次の時間の最初に前時の振り返りを行うので、そこで今日ホワイトボードに書いた英文をもう一度全員で見直し、内容を共有しながら文法的な誤りにも気づかせたい。
- Q4. 中学一年は書く活動への抵抗があると思うが、小学校の学びとのつながりをどう工夫しているか。
- A5. 一年生を教えた時にはできるだけギャップをとりのぞくように、会話練習を取り扱っていた。中学校はある程度ライティングをいれなければならないので、そちらに重点をおかざるをえない。

指導助言 《指導助言者：宮崎大学教育学部 東條 弘子 准教授》

- ・ 小川教諭はこの1年間で7回の研究授業をしてきた。（以下授業風景のビデオを紹介しながら）
- ・ 初回の研究授業では、先生に与えられた新出語句の意味を辞書で調べていたが、7か月後の授業では、教師の“Why do you go to USJ?”に対しての生徒の答えの中にあった friendship を取り上げ、「友だちの船って何？これを辞書でひいてみよう。」と話の流れから気になった語句を辞書で調べさせている。生徒たちは知りたければ自然と辞書をひくようになっている。
- ・ 6月の授業では、ハキハキとした発言ではなく、グループの生徒同士がぼそぼそと語り合うようになった。まず母語で思考を複雑化して学びを深めることができるようになっている。
- ・ 協働学習を定着させるには3年かかるといわれている。
- ・ 生徒が変わっていくためには研究授業しかない。自分の授業を録画して子どもの変化を見取る。（映像は前から撮るのが望ましい）
- ・ 教師はもっと自分の授業を公開していくべきである。1年間の中で一度も研究授業をしない教師は自分のやり方を変える機会を失い、教師主導型の授業を反復しているだけである。それは授業を私物化しているとも言ってもいい。

公開授業（高校）学習指導案

平成30年10月19日（金）
 宮崎県立高鍋高等学校
 1年1組 普通科探究科学コース
 （男子28名 女子15名）
 指導者 教諭 肥田木洋之

1 単元名 Lesson 4 Hospital Art (SANSEIDO MY WAY English Communication I New Edition)

2 単元の目標

- (1) まとまりのある英語を聞いたり読んだりして、全体の概要や内容の要点を適切に読み取ったり、聞き取ることができる。（知識・技能）
- (2) ホスピタルアートを通して得た知識や情報を活用して、自分の意見や考えを外国語で表現することができる。（思考・判断・表現等）
- (3) 聞き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用し、話の内容や自分の考えを相手に伝えることができる。（学びに向かう力、人間性等）

3 教材観

本単元ではホスピタルアートが病院に携わる人々にどのような影響を与えるか学ぶことができる。病院を、病気を治す場所という機能的な側面だけで捉えるのではなく、病院に携わる人々の感情的な部分に焦点を当てることで人々の不安やストレスを解消しようと試みている。この教材を通して、生徒が抱いていたであろう病院に対するイメージに、新たな視点を加えることができる。

言語材料として、進行形、現在完了形、過去完了形を扱う。誰もが訪れたことがあるであろう病院についての話であり、生徒にはイメージしやすい内容である。そのためリスニングや音読を通して繰り返し本文に触れ、言語材料や表現を定着させるのに適している内容である。

4 生徒観

本学級は普通科探究科学コースで、2年次に課題研究に取り組む。そのため1年次には地域や社会での課題探究や協働的な学びの集団作りに取り組んでいる。生徒は意欲的で好奇心が強く、目標を定めながら学習に取り組んでいる。英語に対して苦手意識を持つ生徒もいるが、毎回の授業で英語でのコミュニケーションを楽しみ自己表現力を磨いている。2学期よりフランスから留学生を迎えて、異文化に対する興味関心と英語コミュニケーションの必要性が高まり、よりよい学習環境が整っている。

生徒は授業でのコミュニケーション活動を続けるにつれ、英単語や表現力が不足していることに気づき、知識習得の必要性を強く感じている。そのため、テストのためだけではなく、自分の考え方や意見を伝えるための練習として授業での音読活動などに積極的に取り組もうとする雰囲気がある。

5 指導観

授業の形態は、横浜の中学校で導入されている5ラウンドシステムを高校用にアレンジし、学年で共有して取り組んでいる。本单元の授業は、既習事項を活用し即興性を高める帶活動と教科書を用いて言語技能を高めていくテキスト活動から構成されている。帶活動ではペアやグループでのコミュニケーション活動を設定し、これまでのテキスト活動で学んだ知識を活用する場面になる。ピクチャーカードを用いた基本文、時制、疑問文の練習やペアでのスマートトーク、本文の内容に関連したショートストーリーをリテリングする活動などを行う。

テキスト活動では音声による導入から始まり、音に慣れさせたあと文字を利用して定着活動へと進んでいく。定着活動では英文を意味のまとまりごとに区切った日本語訳との対照表を用いて英訳を素早く行う瞬発力を高める。また、本文の動詞や熟語部分を穴あきにした文章を用いて読みの練習を行い文の構造や表現の定着を図る。最後に本文の内容を表した絵やキーワードを用いてリテリングを行う。

本時の指導にあたっては帶活動で生徒が英語を使う必要性を作り出し、興味関心と英語を使えるようになりたいという欲求を高めたい。テキスト活動では英語の技能と瞬発力を高める練習を行い、リテリング活動を通して、伝える内容と英語表現を結び付ける。英語の正確性に重きを置きすぎず、コミュニケーションに主体とした活発な言語活動がおこなわれる授業を目指したい。

6 本单元の評価規準

単元（題材）	評価規準		
	①知識・技能	②思考・判断力・表現等	③学びに向かう力、人間性等
病院に設置されている芸術作品から、人々を癒すことができる芸術の力について学ぶ。	まとまりのある英語を聞いたり読んだりして、全体の概要や内容の要点を適切に読み取ったり、聞き取ることができる。	ホスピタルアートの内容を通して得た知識や情報を活用して、自分の意見や考えを外国語で表現することができる。	聞き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用し、話の内容や自分の考えを相手に伝えることができる。

7-1 指導計画（帶活動）

時	主な学習活動	評価方法
1 2	ペアトーク（家族について） モデル文暗唱、パーソナライズ活動	観察 ペア評価
3 4	ペアトーク（旅行について） モデル文暗唱、パーソナライズ活動	
5 6	ペアトーク（好きな本について） モデル文暗唱、パーソナライズ活動	パフォーマンス評価 (スピーキングおよびライティング)
7 8	ペアトーク（友人について） モデル文暗唱、パーソナライズ活動	

7-2 指導計画（テキスト活動）

時	主な学習活動	評価規準			評価方法
		①	②	③	
1・2	・リスニングによる本文内容理解	○	○		観察
3・4	・教科書本文の音読（音声）	○			観察 ペア評価
5・6	・教科書本文の穴あき音読（文構造）	○		○	観察 ペア評価
7・8	・リテリング活動（本時）		○	○	パフォーマンス評価 (スピーキングおよびライティング)

8 指導過程

過程	時間	指導内容	学習活動	指導上の留意点
帯活動	15	ペアトーク（3ラウンド） ・準備（30秒） ・トーク（60秒）	・トピックに応じた自分の考えを相手に伝える。	・英語の正確さよりも伝えたい内容を大事にする
	4	ライティング	・自分が話した内容をノートに記入し、語数を記録する	・文構造に注意しながら自分の考えを書かせる
展開	10	スラッシュ読み(sec3) ・音読練習（4分） ・同時通訳練習（6分）	・音声を介してチャンクごとの意味と表現（音声）を結びつける	・瞬時にチャンクごとの意味および音声化の処理が行われているか確認する
	8	穴あきワークシート ・ペアチェック（8分）	・内容から考えて、空欄になった語を補いながら音読をする	・内容を考えながら発音、intonation、間の取り方が出来ているか確認する
	10	ストーリーリテリング ・ペア（10分）	・絵やキーワードを使って自分の言葉でストーリーを再現する	・相手が理解できるように工夫をしながら英語を話させる
まとめ	3	本時のまとめ	内容を振り返る	本時の振り返りを行わせる

授業者振り返り

- ・これまで大学入試を目標に授業展開をしていたが、生徒の喜びや楽しみをどう授業で展開していくか、生徒が満足できるかを考えてきた。
- ・初めは、生徒自身が英語を話すことに抵抗があるように感じた。モデル文を提示し、少量の英語からの発話を促し、生徒の意欲を引き立てていった。
- ・力をつけていくために様々な仕掛けが必要で、土台づくりをしっかりと行っていきたい。

質 疑 応 答

Q1. 5 ラウンドシステムについて

A1. 横浜で実際に行われていて、私自身が高校用にアレンジして作成した。1. リスニング 2. 音と文字 3. スピーキング 4. 穴あきプリントを用いた練習 5. リテリング それぞれのラウンドで目標を設定し、インプット・アウトプットを行っていく。本校では1レッスンを4ラウンドにして行った。3セクションの中で英文を聞いた回数は15回になり、活動を通してさらに増える。話す回数は20回を超える。「聞く・話す」を多く繰り返すことで脳に刷り込ませていく。本時では「聞く・話す」というやり取りを重点においた。

Q2. fluency と accuracy について

A2. 正確さを求める生徒は止まるので、長いスパンの中で少しずつ修正していく、指導するタイミングを入れている。ペアの変更や活動を通して、モチベーションにつながり、会話がはずんでいく。話したい → 伝わらない → 伝えたい という意欲が出てくる。授業の中でフィードバックすることもあるが、ノートに書かせてチェックしている。会話ですぐ訂正されることはないが、徐々に言いたいことや伝えたいことが見えてくるので、それをもとにモデル文を作っている。生徒が言いたいことに近づけていく。

指 導 助 言

《指導助言者：熊本大学大学院人文社会科学研究部 長嶺 寿宣 准教授》

- ・緊張している場面で生徒がよく発話をしていた。
- ・小中高でしっかりと連携し、教科化されることで評価等が加わり、授業展開を明確にすることで生徒のモチベーションを維持していくことが大切である。
- ・小中高の長いスパンでどのようにして英語に関わるか考えていいかないといけない。
- ・5ラウンドシステムをそのまま使うとやらせっぱなししが出てくるので、目標立てて指導していくことが重要視される。
- ・生徒の英語をじっくり観察して、形式面で気づいたこと・全生徒が間違えそうことをしっかりと把握して指導する。
- ・実際の現場で試していただき、先生方独自の手法を定着していただきたい。

第1分科会A（高等学校）

○カスケード式研修の実践とその成果と課題

発表者 牛島 大輔 教諭（大分県 大分鶴崎高等学校）

指導助言者 麻生 雄治 教授（宮崎公立大学 人文学部）

司会者 渡邊 真平 教諭（大分県 大分鶴崎高等学校）

質疑応答

Q1. 生徒の学習意欲が高まったという報告があったが、どのような取り組みで生徒の学習意欲が高まったのか、もう少し具体的に教えてほしい。

A1. 1学期間は、コミュニケーション英語Iの授業では、ハードルを下げて行った。指示が分からないと意欲も低下するため、大体似たような流れで授業を行った。活動を入れながら、ハードルを絶妙に設定するように調整している。

指導助言

《指導助言者：宮崎公立大学人文学部 麻生 雄治 教授》

《真似したい効果的な点》

- ・ カスケード研修のキーワードは「Personalization」である。「教科書ベース」「無理なく継続的に」「原則英語で」は大事であり良い取り組みである。「単語の指導は日本語で行う」のは正解である。
- ・ Survey activity / Line activityなど、ペア活動を促すための方法としてはとても面白い。
- ・ 授業は Input から Output への流れとなっていた。(Picture) Retelling はゴールではない。ゴールはあくまでも Output である。Retelling のあと Personalization である。Retelling + 1 の活動を勧める。Retelling した内容に、自分の感想を加えることで Output となる。そこからやりとりが生まれる。
- ・ 生徒の授業の様子（ビデオより）を見ると、生徒はとても声を出していて、素晴らしい。生徒と先生が良好な人間関係を築いている様子が伺えた。
- ・ ICT の効果的な活動が行われている。

《今後の授業に向けて考慮すべき点（皆が一緒に考えるべき点／これからの課題）》

- ・ 「話す」ことに意欲が低い。また、苦手にならない・嫌いにならない指導をすることで、生徒の意欲が喚起される。

- ・ 表現活動のあとのフィードバック、評価の方法を工夫するとよい。昨日の公開授業は、その場で recast していた。言いながら訂正してあげる、というとても上手なフィードバックだった。
- ・ 「流暢性」か「正確性」か、ということを考えた時には、「流暢性」(量を重視)から先、という考え方を持って取り組んでみたらよい。流暢性を促進するためには、即興での1分間トークや英問英答などがよい。語数を計測することで評価を行うことができる。(ワードカウンター使用など)
- ・ スピーチ・ディベート・ディスカッションを授業に取り入れる。
- ・ 英語好きな学習者をつくる（増やす）ことが英語教師の最大の使命である。

第2分科会A（中学校）

スローラーナー(slow learners)の読解力・聴解力を育む授業実践 ～課題探索型アクション・リサーチを用いた授業改善～

発表者 玉城 昇太 教諭 (沖縄県糸満市立糸満中学校)

指導助言者 松本 祐子 准教授 (宮崎公立大学 人文学部)

司会者 儀保真理子 教諭 (沖縄県南風原町立南風原中学校)

質疑応答

Q1. 学習に困難を抱えている"Slow Learners"に長めの文章を読ませる際に、どの様に新出単語・難語・既習だが忘れてしまっている単語を与えているのか。

A1. 文章によっては、何も与えずに推測させている。また、単語をあらかじめ導入し、確認をして読解させることも多い。エキスパートリーディング（教科書の各パートを分担してリーディングを行い、グループのメンバーにわかりやすく伝える活動）の際には、時間短縮のためと、英文を読み取る時間を生徒達に多く与えたいので、新出単語リストを与えていている。それでもわからない場合には、出来るだけ自分達で辞書を活用する様に指導している。

Q2. 糸満中学校のWork Sheet（絵の付いている部分）で、予測する活動の後にどの様な流れで読解する活動につなげているのか。

A2. 「予測」しているので、答がずれることがあるが、先ずその答を確認し、4パートある部分の前半はグループで確認し、後半部分はQAに答え乍ら、jigsawで判らない箇所をお互いに確認させている。

Q3. 南風原中学校：エキスパートリーディングにはどのくらいの時間をかけるのか。

A3. オーバーすることもあるが、1時間を割り当てている。詳しい内容はその後で扱う。

Q4. 小学校で良く使用されるチャンツを、中学校で活用した取り組みをしているか。

A4. 糸満中学校⇒活用していない。 南風原中学校⇒興味を持ちそうなものを時々使う程度。

指導助言

《指導助言者：宮崎公立大学人文学部 松本 祐子 教授》

- ・ "Slow Learners"に焦点を当て、入り口での指導を非常に丁寧に行い、その後、段階を追って繋げていく工夫があった。また、上位層・中位層が退屈しない工夫もあり素晴らしい。
- ・ アクションリサーチ(AR)がキーワードの一つだが、授業改善方法として、主観的になりがちな自分の授業を、第三者的による多面的な考察を取り入れられると更に良い。
- ・ "Slow Learners"を英検のスコアだけでは必ずしも定義出来ないのではないか。上位層・中位層・下位層を分けた場合に、実際には中位層の中にも"Slow Learners"がいる可能性もある。また、

下位層でも "Slow Learners" ではない可能性もある。研究期間の中で変動があった場合の対応策をきちんと持っておくと良い。

- ・ 生徒の categorization について：グループ分けする場合に、生徒が「自分はスローラーナーなのだ」とレッテルを貼られた気分になったり、意欲が削がれたりしない様に、生徒の感情については常に配慮が必要である。
- ・ 読解力と聴解力を合算スコアにしているが、読解力と聴解力では、伸びに要する時間が異なる。語彙がわかつても、その意味が文脈でとれないなど、語彙の低さの懸念があるので、形と意味と機能のリンクを探って貰いたい。

第3分科会A（高等学校）

Teaching Practice of Project-Based Learning in a Vocational High School

Presenter YOSHIHARA Takahaya (Oshima High School, Kagoshima)

Adviser YASUI Makoto (Minamikyushu Junior College, Miyazaki)

Moderator IKOMA Shinya (Oshima High School, Kagoshima)

質疑応答

Q1. Your students make presentations and projects using Facebook, Youtube and so on.

I want to know how to be good with that kind of technology.

A1. You can go to electrical appliance stores like Yamada Denki...(laugh). I use computer online, “Prezi” for presentation, download free software. Google form can also be a good tool. It is really good. I change ideas, share information with teachers, and develop our teaching skills. I also attended some workshops in NY and other places in abroad. They were very effective and inspiring.

Q2. (1) How many students are there in one group?

(2) How do you assess students individually?

A2. (1) There are 3-5 students in one group.

(2) As a group, I evaluate students based on Rubric (Appendix 3) and evaluate individual student how they worked in the group, like, what kind of job they did, what kind of roles they took in the group. So I would like students to do jobs in the group as equally as they can. I used the whole second semester for making presentations, posters. Before starting new lessons in the textbook, I always think how we can use the content in presentations. Now I am in a new school so it is kind of a challenge to do my presentation-centered lessons. But I'll try my best.

指導助言

- PBL is mainly for higher level or post-graduated students so it could be a real challenge to introduce PBL into lessons in Vocational High School but Mr. Yoshihara has been successful. What is important is just do it and see what will happen.
- Benefits of PBL, especially authenticity and personalization could be clear purposes to use English. The PBL lessons would be a motivating opportunity for students' future career.

- PBL would be the ideal idea if teachers work on this as a team. Let's start new things as a team. It should be for the whole school not just for a few classes.
- Mr. Yoshihara continues endless efforts and they are worthy of praise. We should keep learning teaching methods to improve our teaching skills.

第4分科会A（中学校）

表現力を高める指導

発表者 荒木 美香 教諭 (長崎県 南島原市立深江中学校)
 指導助言者 高松 泰 指導主事 (宮崎県 宮崎県教育委員会)
 司会者 城谷 香織 教諭 (長崎県 南島原市立南有馬中学校)

質疑応答

- Q1. 小学校との連携は実際やっているのか。日々の授業の中で即興性とか意外性とか、日々の取り組みの中で実践されていることがあれば教えてほしい。
- A1. 小学校との連携についてということですが、これは各町によって温度差があります。即興性とかそういうことについてのご質問ですが、なかなか取り組みが短い期間でしたので、そういうところまで追いついていないのが実態ということで、今後の私たちの課題です。
- Q2. 同じ市内の先生方との連携の取られ方、たとえばワークシートを共有されているとか、協力のしかたというか教えていただけたらと思います。
- A2. 市内の英語部会を定期的に開いた。市の共有フォルダというのがありまして、ネットワークでつながっています。共通のものを入れてお互いに使い、意見を出し合い、共有しています。
- Q3. 市で取り組んでいるのは、どこかをモデルにしているのか？年間スケジュールを考えて、それに従ってみんなで取り組んでいるのか？
- A3. どこかをモデルというよりも、市の共有フォルダを活用しながら、これいいなと思うワークシートを使わせていただいたり、お互いに参考にしあったりしています。授業の進度にあまり影響がない程度での「書く」時間の設定とか、課題の形でやってきた。
- Q4. ある程度の力がある生徒は、このような取り組みをするとどんどん伸びていくと思うが、極端に書くことを苦手としている生徒の、単語とか拙い生徒に対する手立てがあれば教えてほしい。
- A4. モデル等多めに紹介したりとか生徒と対話をしながら一緒に作っていくという形での対応が現状かなと思います。
- Q5. 2点お聞きしたい。ワークシートの効果的だった点は？評価についての課題とは？
- A5. ワークシートで効果的なことですが、なかなか検証というところまでいってない。「書く」「話す」活動の評価についても研究段階であり話し合いには至っていない。「させる」ということがここ数ヶ月で精一杯だった。
- Q6. 今後の課題に、「ライズアップイングリッシュ」とか「イングリッシュキャンプ」のことが書いてありますが、具体的な取り組みは？
- A6. 「ライズアップイングリッシュ」は、中学校卒業までに身につけさせたい英単語および英語表現、約1,000語の学習ができるソフトになっています。「イングリッシュキャンプ」中学1年生を対象にしたもので中学生が外国人のコーチと交流をしながら実践的な英語を学び、英語を用いてコミュニケーションの楽しさを経験する活動になっています。

指導助言

《指導助言者：宮崎県教育委員会 高松 泰 指導主事》

- ・ 繰り返しておこなうことは重要。特にモデルがしっかりと子どもたちに示されているというところが良い。「書く」活動が最も苦手とする活動であることが多いのですが、このようなモデルがあると苦手な子どもでも、まずそのモデルを真似るところからスタートすることができる。
- ・ 自分の好きな英語の言葉を選んで、その理由を伝えたり説明をしたりという活動は本当にオリジナリティにあふれる素敵な活動である。
- ・ 即興性を高めたり、各領域のバランスの良い力を持つるために、領域を関連づけた指導を行うといった点、また CAN-DO リスト等に基づいた計画的な取り組みを 3 年間で行うといったところあたりを実践されると、さらに素晴らしい取り組みになる。

第5分科会A（中学校）

グローバル社会で生きる資質・能力を身に付けた生徒の育成

～円滑な小中連携を通して、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善～

発表者 山下 里紗 教諭（鹿児島県 鹿児島市立伊敷中学校）

指導助言者 徳地 慎二 教授（宮崎産業経営大学 法学部）

司会者 入江 将紀 教諭（鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校）

質疑応答

Q1. 小学校での言語活動研究を参考にさせてもらっている。鹿児島県は研究体制が整っていると思う。

- ① 英語学習の課題として即興性をいかに身に付けるか、どんな場面設定を作るか、どんなふうに考えていくかコメントをいただきたい。
- ② 英語科における深い学びとは、探求型の課題であると考える。活用型の課題設定が多いが、探求型にならないと深い学びにつながらないと思う。深い学びについてコメントを戴きたい。

A1. ① 即興性の場面について

苦手意識を感じている生徒はストップしてしまうことが多い。まずは、話したい、会話を継続したと思わせるための手立ての必要性を感じる。ロジカルカード、マッピングなどの補助的なものを活用し、子どもたちが苦手を感じずに活動を繰り返し行うことで力をつけさせていく。テーマが適切であればあるほど、子ども達がもっと話したい、伝えたいと興味をもって取り組み、力をつけていくと思われる。

② 深い学びとは

他者意識が大事であると思う。相手に合わせたより良い表現を考えるうえで、単に知識の活用だけでなく、相手にとって分かりやすい表現は何かを考えることが、子どもたちにとって深い学びにつながるのではないかと思う。

Q2. 文法指導について、ルールに気付かせるという話があったが、中学校の段階ではどのぐらいの範囲の問題を想定してルールに気付かせることをしているのか。どの程度の実践をされているのか。また、談話能力の指導についてもお聞きしたい。

A2. 昨日の小学校の指導は過去形を使用されていたが、それについて説明はしていない。いずれすることにはなるだろうが、とにかくいろんな表現に触れさせることが重要であり、本来そのような指導であるべきだと考える。しかし、実際は多くの英語の授業が演繹的である。これらを帰納的に変えていかないといけないと感じる。子ども達は大人が思う以上に言語能力がある。子供はルールに自ら気付くことができる。子どもの気づきの後にルールを提示する。多くが説明が先で演習して・・・であるが、その流れを変えていく必要がある。授業においては、インプットを十分に与えるべきである。中学校は小学校に比べてインプットの量が少ないのでないか。インプットを十分にしてそこからアウトプットにつなげるべき。談話能力については、以前は一文単位に陥りやすかったが、現在は教科書のターゲットセンテンスも複文であったりQ&A形式であったりと談話と場面が生まれるつくりとなっている。

- Q3. ロジカルカードとマッピングについて教えていただきたい。日本語でも難しいが、他教科とも連携してやっているのか。
- A3. 1年生の段階では簡単な接続詞を用いることで、内容のつながりを考えて複文を作ることを目的としている。即興性をつけるために、引き出しを増やしていくツールの一つとしてカードを活用している。段階をおって、ひっくり返した状態で出てきたカードを見て言わせたり、使えるカードを選びながら言わせたりしている。
- Q4. 落語を披露する様子が紹介されていたが、異学年の学習について、その指導法をより詳しく教えていただきたい。
- A4. 落語自体は2分程度の内容である。教科書の内容を再編成している。単元自体は4時間と表現練習を取り入れている。流暢さのみでなく、ジェスチャーの意味を理解させ、他者を意識した発話、表現を身に付けさせる指導している。小学校での学びを生かせる。相手に分かりやすく伝えるためにどうすべきかを考えて表現している。探求型の学びがある。

落語を発表していた生徒は、英文を聞いて解釈して表現できていた。言葉の裏側を考えるので、色々な解釈ができる。そこを考えさせ、表現させるところに価値がある。この生徒は、英文が染み入るくらい練習しているであろう。それくらい練習すれば、活用する場面でここで学んだ表現を活用できるであろう。大事な活動の一つである。

- Q5. 望ましい小中連携の在り方に興味がある。昨日の小学校の公開授業では小黒板に流れが貼ってあったが、鹿児島では小中で共通実践していることがあるか。
- A5. 今やっと連携を始めたところである。授業を見せてもらうところから始めている。小学校と同じように紙を貼っていく所まではしていないが、クラスルームイングリッシュの統一を目的として小学校に一覧表を渡している。小学校から中学校への英語学習がスムーズに移行できるよう活用してもらっている。

指導助言 《指導助言者：宮崎産業経営大学 法学部 徳地 慎二 教授》

《高大連携について》

- ・ 高校から大学に進学する際、実際は学科の内容が見えていないという課題がある。宮崎産業経営大学の取組としては、大学の教員が高校に行ってそれぞれの専門の出前講義をしている。鵬翔高等学校の英語の先生との連携を色々としている。具体的にはTOEICの実際や指導方法を伝授している。
- ・ 現状として、大学に入学てくる生徒の中には、中学校で押さえておくべき内容や5文型が身についていない学生もいる。それゆえに自己肯定感が低い学生も多い。
- ・ 自己肯定感をもつことを学生に持たせて卒業させたいと感じる。日本の高校生、大学生は自己肯定感が低い。実は就職活動において致命的である。
- ・ 英語の学習を通して、生徒一人一人にやればできるという自信や自己肯定感をもたせたい。多くは中学生のうちにつまずきあきらめる現状があるが、すこしでも成長させていきたい。
- ・ 小中連携はすばらしい取組である。各県で取り組むことにより、発展していくことと思う。

第6分科会A（高等学校）

中高6年間を見据えた英語によるコミュニケーション能力の育成

—CAN-D0 リストと ICT を活用したパフォーマンステストの研究を通して—

発表者 宮西 紀生 教諭（佐賀県 鳥栖高等学校）
 浜崎 勇太 教諭（佐賀県 鳥栖高等学校）
 指導助言者 竹野 茂 教授（宮崎公立大学 人文学部）
 司会者 佐々木佳寿子 教諭（佐賀県 神埼高等学校）

質疑応答

Q1. パワーポイントの準備についてはどのくらいの時間をかけているのか。

A1. 授業の中では作成の時間を3時間程度確保した。もちろん持ち帰り、授業以外の時間を使って準備をした生徒もいる。発表には5時間をかけたが、それだけの価値があるので時間をかけて行った。

Q2. セキュリティーや肖像権の問題についての対応について教えてほしい。

A2. 次年度、下級生の手本にすることを生徒に伝え、許可を得ている。必要があれば再度、撮り直しを行うこともある。

Q3. 通常の授業を進める中で、時間確保のために心がけていることは何か。

A3. 同じペースではなく、定期テストの作成の範囲に留意しながら進めている。

Q4. ALT の活用についてはどのように行っているのか。

A4. パフォーマンステストを聞いてもらっている。

Q5. 文法の訂正について ALT を活用しているか

A5. 教科書に関連する活動に関してアクティビティを準備してもらっている。また中～高の生徒の作文のチェックを、時制だけみてもらうなど、絞って ALT の負担の無いように見てもらう（共通のエラーのみ全体で確認）

Q6. 少人数についてはどのようにになっているか。

A6. 1・2年は教室で一斉で、3年のみ習熟度で分けている。

Q7. CAN-D0 リストの作成による生徒の変容についてはどう感じるか。

A7. 上級生のモデルを見ることによって、よりイメージしながら具体的にゴールを示すことができ、生徒は取り組みやすかったのではないか。

Q8. パフォーマンステストとその他の4技能の整合性についてはどう考えるか。

A8. パフォーマンステストの目的・評価がスピーチングのものと重なってしまう部分もある。4技能をすべて取り入れたものであるべきだが、統合したものになるように今後改善していくべきだと感じている。

指導助言

《指導助言者：宮崎公立大学人文学部 竹野 茂 教授》

- 4技能とパフォーマンスの位置づけをしっかりとやっていくべき。教員側が方向性をしっかりと共通理解することが大切。

- ・ CAN-DO リストについては、中高との連携は時間確保の観点から困難な現状であるようなので、時間のない中で見直すために、紐付けを行うとよい。
(例) 中学校のこの活動（項目）が、高校ではこの活動につながっているということをデータ上で共有するとよいのではないだろうか。
- ・ 生徒の CAN-DO リストの活用については、1回ではなく何度も通過できるようにチェック欄を増やし、ラウンド制にするとよい。繰り返すことで、質が変わっていく。
- ・ 生徒の英語力の差（附属の中学校から上がってくる生徒と、市内の中学校から上がってくる生徒たちの英語力の差）を埋めるために、入口の差を CAN-DO リスト等を用いて明確にするとよい。
- ・ 英英辞典の活用は大変良いので続けていくとよい。単語の定義を、その単語を使った文章で表現しているものがおすすめ。

第7分科会A（中学校）

小中連携の視点を踏まえた豊かな表現力の育成を

目指した授業の創造

発表者 益本 真裕 教諭 (熊本県 山鹿市立菊鹿中学校)
 福岡 真理 教諭 (熊本県 山鹿市立鹿本中学校)
 指導助言者 長友 淳 指導主事 (宮崎県教育研修センター)
 司会者 飯田 友紀 教諭 (熊本県 菊池市立菊池北中学校)

質疑応答

- Q1. CAN-DOリストを中学校で作成することについて、小学校の児童がどういう実態にあるのか、把握することが大切だが、どのように理解を進めているのか。
- A1. 小学校の実態を知るために小学校の授業を見に行ったが、ただ見るだけ、それでは足りなかつた。だからこそ小学校の教材(Hi, Friends!)を読み込み、小学校の学習過程を知ること、そして指導案を熟読して小学校の授業を見ることが大切。そして小学校の先生と話すことが必要。
- Q2. 生徒に対して、CAN-DOリストを具体的にどのように活用させているのか。
- A2. 3年間のCAN-DOリストを生徒のファイルに張らせている先生方もいる。または単元の最初に「今回の単元を学ぶことでどんなことが英語ができるようになるか」と生徒に示す。黒板に毎回示す先生もいる。とにかく、生徒に学習の目的をもたらせることが大切。
- Q3. CAN-DOリストを教師と生徒が共有してすることで、どんな効果が得られるか。見通しが持つことができるが、生徒が変わったと感じることは何ですか。
- A3. 「英語のパンフレットを作ろう」「日本文化を紹介できるようになろう」などのCAN-DOを生徒たちに示すことで、なぜ、この学習をするのか、生徒たちが見通しをもって学習できるようになった。また、自分たちで学習過程の中で大切なこと、使える表現をメモするようになったことが大きな効果だと考える。

指導助言

《指導助言者：宮崎県教育研修センター 長友 淳 指導主事》

- 映像を見ると生徒たちが「書くこと」ばかりやってない。ずっと生徒たちが英語を「話している」。だからこそ、力がつくと感じた。また、2つの地域の2年間の研究。そのために、何度も研修を重ねている。地域によって子どもたちの実態や教科書も違う中で、同じ実践を行っているのが、基礎基本の意識改革をしていくことを共通の思いにして臨んでおり、授業改善に向けて、先生方が真摯に取り組んできたことが素晴らしいと考える。
- 「CAN-DOリストの作成・活用」について、英語を用いて生徒に何ができるようにさせるか、授業のねらいが明確になり、見通しをもった指導と評価につなげることになる。授業者が意識することで学期ごとや1年間、または3年間を見通した指導に変わる。CAN-DOリストは毎時間振り返させるのではなく、長いスパンで振り返ることが大切。
- 「基礎的・基本的事項の確実な定着」について大切なことは①学期の終わりの発表活動を意識し

ながら授業を進めているということ、②生徒が発信する必要がある言語材料に力を入れて指導しているということ。これらが学習内容の精選にもつなり、基礎基本の徹底に繋がる。

- ・ 「言語活動の充実を図る取組」について、生徒たちにコミュニケーションの目的や必然性をもたらせることが必要。また、生徒自らが学習の見通しを立て、主体的な学習につながる。
- ・ 「小中連携の視点を踏まえた取組」について、本地域の先生方は実態調査に取り組まれている。視点をそろえるために、「知る活動」を行っている。お互いの理解を深めることが小中連携の一歩であり、子どもたちの学びの連続性を意識した指導が求められている。確かな学びの連続性を育てるために、歩み寄ったり、協力したりして新たな外国語教育を築いていただきたい。

第8分科会A（高等学校）

Moodleを使った音読の評価 ～課題と可能性～

発表者	堤 厚	教諭	(熊本県 第二高等学校)
指導助言者	長友 美紀	副主幹	(宮崎県教育研修センター)
司会者	後藤みどり	教諭	(熊本県 第二高等学校)

質疑応答

- Q1. 佐賀は生徒一人ひとりがタブレットを持っている。グーグルクロムスピーチノートを活用し、ディクテーション等に折り組ませているが、Wi-Fiのある教室でも接続が上手くいかない生徒が必ず出るそのような場合の対処法は？
- A1. タブレットを全員で使うとwi-fiでは止まってしまう。パソコン室使用がよい。
- Q2. 自宅での学習を進める工夫として、単語を覚えるアプリのクイズレットを使っている。ムードルで1500のプラグインが出来ると聞いたが、今までにどんなのを試したか。
- A2. ホットポッドが穴埋めやクイズができる。字幕を見せたり、スピードを変えたり、TVを使ってできる。
- Q3. ムードルは続けるのが難しいと言っていたが、具体的にはどんな点か。
- A3. 生徒の感想は楽しかった、音読を聞いてもらえて良かった、またやりたい、というのが多い。しかしまだ1度しか実施できていない。続けることに意味がある、集めたデータをグラフ化したりできるのだが、題材を乗せること、実施して評価すること、パソコン室の使用時間が限られるなどのクリアしなければならないことが多い。他教科にも広がりがあるので、一人では出来ないことが多い。様々な方の協力が必要になる。
- Q4. 生徒へのフィードバックどうしているのか。データが残っているのでグラフ化したりできるのだと思うが、生徒にはペーパーで渡すのか。
- A4. 生徒がムードル上で自分で見ることができるが、評価はペーパーで渡す。記録を残すような工夫はできると思う。
- Q5. 課題として自宅で行うことができるか？
- A5. 出来る
- Q6. 情報のコンプライアンスは大丈夫か。
- A6. MOODLEは大丈夫。大学等でも使われているので信頼がある。
- Q7. 音読テストの頻度はどれくらいのペースで行っているのか？ 定期的に行うことで生徒自身の伸びが見られるのでは？
- A7. まだ1回しか出来ていない。目標は数ヶ月に一回程度。学期に1回は実施したい。

指導助言

《指導助言者：宮崎県教育研修センター 長友 美紀 指導主事》

今回は効果的なテストや評価のあり方というテーマだが、先生自身がまだ実施途中である。九州大会だからこそ、このような提案があつて他県への広がりに繋がつて良い。

<勉強になった点を3つ>

- ① これまであったものを進化・深化させるために、評価を使った点。
- ② AIによって仕事が奪われるのではないかと言われているが、そうではない。分化させる。機械できること、人間がすべきことがある。スピードを計ったり、記録を残すオートマシティーは機械、プロソディーの部分（通じるかどうか、どこで区切るかなど）は人間、という使い分け。機械と人間の共存があつて初めて今まで出来なかつたことがより高度に改善されていくということを生徒に伝えなければならない。ただ機械・ICTを使えば良いと言うことではない。人間にしかできないことがそこに加わっていることが良い。
- ③ トライアンドエラー。新しいことへの挑戦が素晴らしい。自分たちももっと試さなければならない。すでにできあがつているものを「これが一番良い」ではだめだと感じる。

<評価について>

評価は必要か？評価することによって何がどう良かったかが具体的にわかる。音読の効果には賛否ある。それは今まで音読が評価されてこなかつたから。評価することで客觀性を出す、どこがどのように良いか、悪いかを示す。評価がされていないと言うことは、良いのか悪いのかさえわからない。評価することで何をどう勉強すればよいかが分かる。新学習指導要領の何を学ぶか・どのように学ぶかに繋がる。評価することで得られる客觀的な根拠の大切さを改めて実感した。

先日県内のある市で、マーケティング専門官をされている方のお話を聞いた。その方が言われていたことが「KOKO」の取り組みからの脱却（「KOKO」：K-カン、0-思いこみ、K-経験、0-思いつき）。音読は相手ができた瞬間にコミュニケーションになる。コミュニケーションの資質・能力を養う手段方法に成りうる。相手のある音読を評価につなげる。中学生などは家庭学習として使える。家庭の人に伝わるように音読させる、録音した物を友達同士で聞き合うなど。プロソディーは伝わるかどうか、なので聞き手に評価してもらうことはできる。生徒はデジタル教材には素早くなじむことができると思う。

<今後の研究に対して2つ>

- ① 音読素材の吟味。

新高等学校指導要領に以下のような音読に対する記述がある。

「書かれた文章や内容を確認した上で、そもそも音読することがふさわしいのか、ふさわしいとすればその音読はどのような目的で行われるのかを明確に生徒に意識させた上で指導することが重要である。」

聞き手に伝わるように音読することはコミュニケーションの最も基本にある部分。さらに新学習指導要領では、聞き手に配慮しながら伝えることが記載されている。今やっている活動に平行して、コミュニケーションの基礎になるよう音読を活用しなければならない。

② 今後の評価

ループリック評価を継続的に行うには多くの人を巻き込んで実施していくことが大事。評価の項目を英検や CEFRなどを参考にして吟味してもらいたい。

新しいことをはじめるることは落とし穴もある。簡単には進まないが新しい取り組みを知り、各学校に持ち帰り、共同研究などにつなげることができる。ここからの脱却への一つのきっかけになる。変化に対応できることができ生き残るすべである。新しい物と古い物を融合させ、地に足をつけた英語教育を進めていきたい。

第9分科会A（小学校）

「小学校文化」に根差した外国語教育の推進

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫・改善を通して～

発表者 藤原 綾子 教諭（宮崎県 三股町立三股西小学校）

指導助言者 アダチ徹子 准教授（宮崎大学大学院 教育学研究科）

司会者 渡部 美紀 教諭（宮崎県 宮崎市立広瀬北小学校）

質疑応答

Q1. 朝の放送は英語でアナウンスしているようだが、どのような頻度で行っているのか。

A1. 毎日放送を行っている。朝、昼、掃除の前と後にアナウンスしている。児童が曜日を言い換えるればいいだけの原稿を用意している。

Q2. 中間評価のタイミングや利点など詳しく教えてほしい。

A2. 中間評価の研究を本校で深く行っているわけではなく、実践を通して必要性を感じ取り組んでいる。活動をして終わりではなく、児童一人一人が工夫し対話的な学びを行う事で、児童同士のコミュニケーションの質が向上しているようである。今後も実践を積み重ねたい。

代表児童のみの中間評価を行っていたが、ペアでの中間評価を取り入れた。友達からの評価などで、クラスの雰囲気がとてもよくなる。学級担任がホームルームなどで振り返ることにより、より共同的な学びにつながっていると感じる。（公開授業者金丸先生より）

Q3. 苦手意識をもつ児童への対応をどうすればいいのか。ALTの発話に対し、苦手な意識をもつ児童に配慮し日本語訳をしてしまうが、どのように対応したらいいのか。

A3. 児童が日本語で言ったことを訂正せず、英語で言い換えて、授業者がよい話し手のモデルになること。教師の評価は高いのに、自己評価が低い児童がいる。個別指導をし、スマールステップを踏ませながら自信をつけさせていくことが、意欲を高めることにつながるのではないだろうか。

Q4. 専科として2校兼務しているが、学級担任ではない教員が授業をする上で、児童との信頼関係を築くにはどう工夫をしていけばよいか。

A4. 児童の振り返りファイルを担任から見せてもらい、メッセージを書き入れて返却している。一人一人に思いを伝えることが児童の心に響いているようである。

Q5. 職員研修の時間を確保するために、どう工夫をしているか。

A5. 校時程を工夫することで、水曜日の職員研修の時間を確保した。（教務主任より）

指導助言

《指導助言者：宮崎大学大学院 教育学研究科 アダチ 徹子 准教授》

- ・ 少数の先生方が、宮崎県の小学校教育を引っ張ってきた。一朝一夕に追いつけるものではない。永い間に蓄積してきた実践を惜しまず提供してくださったことを感謝したい。この発表の中で知り得たことを学校に持ち帰っていただきたい。

- ・ 一番に学ぶべきことは、全職員で学ぶためのシステムを構築したことである。持続可能なシステム創りは学校ぐるみで取り組まなくてはならない。研究班を創り、若手を育てる、英語の授業ができると感じられるような手立てを見つけ出すような取り組みができている。
- ・ 中学校で好きな教科の調査をすると、英語は8位や9位だった。直近、小学校では4位であった。英語の苦手な児童は意欲を高めるスイッチがどこにあるか、傷があるか分からぬ。それは英語に関するものではないかもしない。先生との信頼関係が学習の意欲を高めるのかもしない。
- ・ 小学校外国語科の開始。この困難にチームで取り組めることが、小学校の強み。小学校文化ではないか。同時に、中学校や高校での取り組みを知っていくこともとても大事であり、意義があると思われる。小学校の先生方は、個々に授業研究に取り組んでいると思う。先生方が負担を抱えすぎないように、学ぶシステムを創って、小学校職員全員で外国語教育に取組んでいければ幸いである。

第1分科会B（中学校）

伝え合うことを意識した表現活動の研究

～プレゼンテーションとやり取りの実践を通して～

発表者 杉光 いづみ 教諭 (佐賀県 嬉野市立吉田中学校)
 指導助言者 加治屋 輝昭 指導主事 (宮崎県教育委員会南部教育事務所)
 司会者 渡邊 富美子 教諭 (佐賀県 鹿島市立東部中学校)

質疑応答

- Q1. 生徒がプレゼンを完成するまでに辞書指導等どのようにされているのか、また学習意欲がどのように上がったのか？具体的に。
- A1. 辞書指導をしないわけではないが、自分の使える英語ではどのように言えるかを考えさせ、知っている言葉でなるべく話せるようにしている。
- Q2. ①良いプレゼンとは？ プrezenのモデルを示すタイミングは？
 ②パフォーマンス評価のためのアセスメント材料集めは？
 ③プレゼンの段階の指導
- A2. ①ネイティブの子どものプレゼンを実際見せる。プレゼンコンテストの最優秀賞の学校の映像を見せる。
 ②過去の作品を英語ルームに提示したりしてモデルを示す。
 ③生徒同士ピアラーニングさせる。

指導助言

《指導助言者：宮崎県教育委員会南部教育事務所 加治屋 輝昭 指導主事》

- ・ サンシンメソッド（スーパーティーチャー吉田先生作成）や佐賀メソッドの良さ（資料スライド8枚目）は、教科書を使って4技能を伸ばす素地を作っているという点にある。教科書研究の深さが特徴である。
- ・ 今回のパフォーマンス後のやりとりや即興に到達するための帶活動が素晴らしい。
- ・ 地区全体で理想とする生徒像があり、教員全員がそれを共有しているところが佐賀県のすごいところ。また、それぞれの教科書の単元ごとの先生と子供たちが共通のゴールに向かうところが英語力向上につながっている。
- ・ Program6 のロンドンの導入が素晴らしい。下積みや下準備が発表のためにしっかりとつながっている。最後の書くこと（資料P.49）についても。
- ・ 日頃の学級経営がうまくいっていることが英語学習の鍵。

第2分科会B（高等学校）

中高乗り入れ授業における生徒の学びを深めるためのTTの在り方

発表者 村上 泰子 教諭 (宮崎県 福島高等学校)
 指導助言者 麻生 雄治 教授 (宮崎公立大学 人文学部)
 司会者 椎葉 道淑 主幹教諭 (宮崎県 福島高等学校)

質疑応答

Q1. ① 中高の教員同士でTTをしているとのことだが、読解力と聴解力の観点から、中学と高校が組むことで特に効果があったと思う点があれば教えて欲しい。

② 中高の生徒間の授業での交流はあるのか。事例があれば教えて欲しい。

A1. ① 読解力の観点からは、内容理解においては生徒が疑問を持ちながら読み進むということが大切だと考えている。特に有効だったのは、本文の中からペアで質問を考えさせる活動で、ホワイトボードを用いて生徒自身の質問に他の生徒たちが答えていくという活動を通して内容理解がより深まった。聴解力については測る手段がないが、生徒自身の実感としての自己評価が上がっていることを考えれば、教師が意識して英語を使っていくこと、また高校の教員ができるだけナチュラルスピードにチャレンジさせたり、音読指導に緩急をつけることで、速さや音の連結に慣れさせる工夫をしたことは有効だったと考えている。

② 特に授業を通しての交流はないが、留学した生徒の活動の発表を中学校で行ったりしている。留学担当でもあるので、英語そのものというよりはグローバル感覚を身につけさせる交流ができればと考えている。

指導助言 《指導助言者：宮崎公立大学 人文学部 麻生 雄治 教授》

- ・ 本時の発表の中で特に効果的だと思われる点として、中高乗り入れによる中学校の実態把握、帯活動の活用と工夫、難易度と分量に実用性のある両面ワークシートの工夫、全員の音読テストによるきめ細かな評価、中高統一のCan-Doリストの数値化と活用、横断的タスク活動（くしま学）の実践などがあげられる。
- ・ 今後の課題として、連携型中高一貫校としての6年間を見通したシステム作り、協力体制（同僚性）の構築、スピーキングテストの評価方法などが考えられる。
- ・ よい英語の授業とは、英語力を伸ばせる授業、指導者と学習者の間に信頼関係のある授業、学習者の「気づき」を促す授業。
- ・ 英語は芸術や体育と同じ「実技科目」である。
- ・ 教師の役割はコーチング。笛を吹くだけ、号令をかけるだけではなく学習者の理解度・達成度を理解し、適切なフィードバックを与え、その能力を最大限に引き出すこと。学習者にとってネイティブではないモデルであること。
- ・ accuracy はあとからで良い。まずは fluency を確保することが必要。ライティングでも同じこと。

正確さが不十分でも、まずはたくさん書けることが fluency。

- what から why へ、result から outcome の指導へ。
- 発問には、テキスト上に直接示された内容を読み取らせる事実発問、テキスト上の情報をもとに、テキストには直接示されていない内容を推測させる推論発問、テキストに書かれた内容に対する読み手の考えや態度を答えさせる評価発問がある。発問を吟味し、適切に選択することが必要。
- スピーチングの評価では、発音やデリバリーの評価は必要ない。内容・流暢さ・語い・文法が測れれば十分である。
- 互いに授業を公開しあい、同僚性を育てていくことが必要。
- A I が人間の仕事に次々ととつてかわっている時代であるが、どれだけ技術が進もうとも教育は最後は人間、教員であることを信じ、互いに頑張りましょう。

第3分科会B（中学校）

To Make Students Active Communicators

Presenter Hirakawa Yuka (Sadowara Junior High School)

ALT Christine Spiers

Advisor Katayama Hiroki (Miyazaki City Board of Education)

Moderator Imamura Fuki (Hyuga Junior High School)

質疑応答

Q1. Some students may feel they don't like English or they aren't good at English. How do you support these students toward the performance contest?

A1. Talking of performance contest, they have no experience to study English outside of the school. They learn English only at ES or JHS, but their motivation is very high. They sometimes feel very shy or confused in front of the class, but every student can memorize and finish their speech. I always try to encourage or praise them very often. This is the first time to have the performance contest. As you said, some students may feel they don't like English.

Q2. (1) After the performance contest, did Ss watch their video to review or evaluate each other?

(2) (To ALT) Do you use Japanese in the class?

A2. (1) They held the performance test in front of the class, and every student judged the other performers. After they judged, I made a feedback worksheet to share.

(2) During the class, I don't use Japanese at all. But during lunch time, I use a little to help them understand. I use it more at lunch time

Q3. In the video, Ss speak English very well and well-prepared. If you have any tips for Ss to make impromptu speeches to the audience, could you share it?

A3-1. They practiced just in pairs and give advice each other for two minutes in the lesson for 2 weeks.

Q3-2. How about 2nd and 3rd graders?

A3-2. (ALT) It's my rule to come to see me during the lunch time. That is all about speaking. They are trying to answer my questions, so I feel more take advantage of that time. They have to speak it and they easily come up with the English expressions.

Q4. I think Ss have confidence to speak English. I think practical English is the most important. What is the most important communicative activity?

A4. (JTE) During my lesson, I try to use only English. I like talking in English very much, so not only in my class but in other situation, I always speak in English to Ss. I think teachers make Ss fun and enjoy speaking in English.

(ALT) I think speaking is the most practical use in English. Even if it's just a few minutes to speak to ALT or each other in English, just get them used to talking in every lesson.

指導助言

- To make Ss active communicators

1. To create more opportunity for Ss to use English.

Ss want to express their ideas in English, particularly through speaking. We need to set goals for each activity and to create opportunities that allow Ss to actively use the English they have learned in “real life.” When we create opportunities like these, we must keep in mind some points; (1) we need to have the skills as teachers to ensure Ss have a clear understanding of the activity, (2) we need to emphasize the skills Ss require for each activity.

2. To supplement the system of learning contents and learning activities

- (1) It is important to understand the relation of contents and activities between programs.
- (2) To make “My project” effective, we should teach programs while thinking “What can Ss do in this program?”
- (3) For Ss, to use what they learned in the lesson is more important for English ability than learning grammar and vocabulary.

3. To make the best use of resources

- (1) It is possible to gather some ALTs together in a school and have joint lessons.
- (2) If we make the best use of resources such as ALTs, Ss can have good experiences and acquire English knowledge and skills better than using only the textbook.

4. To obtain and analyze data regarding teaching in detail

- (1) Data from paper test, performance test, survey
- (2) Analyze
 - to know what students can/can't do.
 - to know what kind of teaching is effective for Ss.
- (3) Review of our teaching and creation of improved teaching methods.

5. In conclusion

- (1) It is necessary to teach English not only from the textbook but to teach “real” English using textbook and activities.
- (2) The aim of teaching English is not memorizing English words and expressions in English.
- (3) We need to teach in a way that lets students express their English ability.
- (4) Let's think about better lessons through the demonstration lesson today.

第4分科会B（高等学校）

表現力を高める指導

～ファシリテーターとしての教師の役割～

発表者 伊波志麻子 教諭（沖縄県 前原高等学校）
 指導助言者 安井 誠 講師（南九州短期大学国際教養学科）
 司会者 池原 敦子 教諭（沖縄県 美里高等学校）

質疑応答

- Q1. フィードバックの時、スマールステップが良いと仰いましたが、どのようなものが良いですか？
- A1. スピーキングの時は、日本語の語順で並べる子がいたら、主語の次に動詞ね・・・といのように、レベルによって違うが、表現するときの癖を見抜いて、こうしたらよくなるよとアドバイスを伝えるようにしている。
- Q2. ① ペアでエラーコレクションをしているようでしたが、模範解答があるのでしょうか？
 ② 髪の長さで…等でペアを決めるとありましたが、そのペアリングの方法を教えて下さい。
- A2. ① 折り紙の色分けでコメントするように指導している。例えば、黄色の折り紙には良い所を、緑色の折り紙には改善点やこうしたら良くなるよという所を生徒たち同士で色分けして書かれている。コメント程度の分量ではあるが行っている。模範解答はないが、生徒が聞きに来たり、最初に良くできた例を示したりしている。
 ② 動きを入れるのは、午後からの授業や体育の後に行っている。毎回やっているわけではなく、生徒の様子を見て行っている。生徒が「今日は違うことをやるな・・・」と思うような空間を作ることを心掛けている。
- Q3. 点数の割合、平常点の割合。全体的な評価について
- A3. 教科書を使ってアクティビティを行わせた場合には、テスト7割、授業中の活動3割。英語コースについては、レシテーションなども評価に入れている。その際、評価表（声の大きさ・発音等）を提示している。

指導助言

《指導助言者：南九州短期大学国際教養学科 安井 誠 講師》

- 生徒が話せるようになるには、大量の理解可能なインプットが必要である。第二言語学者であるスティーブン・クラッشنも言っているように、自分のレベルより少し難しいレベルのインプットを入れることが大事である。これは生徒が話せるようになるために、どのように教師側がインプットを大量に与えるべきかという、インプットに関する理論である。
- エラーコレクションについて、プロンプト（促し）、リキャスト（促し）も重要である。インプッ

トだけでなく、これらも与えることが大事。生徒は間違うものだと、時間がかかるということを意識してプロンプト等を行う。

- ・ 配慮について。様々な生徒を対象として、授業にユニバーサルデザインという観点。基礎的環境整備と呼ばれている。様々な支援が必要な生徒に対しての配慮（実物投影機、色など）も一教師としてできれば良い。例えば、折り紙の色についても、生徒によっては見えづらいという子がいるかもしれない。ユニバーサルデザインに則った教材を用意することが大事。
- ・ おすすめの参考文献として、大修館 和泉伸一先生（上智大学） 「フォーカスオンフォームを取り入れた新しい英語教育」に、理論的に本日の分科会の理論的裏付けるような内容が載っているので、よろしければ是非。もう1冊は、田尻悟郎氏の「自己表現お助けブック」である。この本は、エラーコレクションについての書籍である。多くのエラーコードが載っているので、こちらも是非。

第5分科会B（高等学校）

「ICTを活用したアクティブラーニングにおける指導実践」

～中学1年生から現在までの取り組みについて～

発表者 西里 勇希 教諭（福岡県 輝翔館中等教育学校）
 指導助言者 竹野 茂 教授（宮崎公立大学 人文学部）
 司会者 梶原 雄一 教諭（福岡県 輝翔館中等教育学校）

質疑応答

Q1. ① ビンゴの内容について教えていただきたい。

② パフォーマンステストを学校全体で系統立てて行えていないのはなぜか。

A1. ① 教科書の内容に合わせたビンゴ教材を活用している。それぞれのラインに英語、日本語が載っている。生徒は選んで書く。生徒は予習しておき、読まれた単語に印をつける。生徒は楽しんで学習に参加できている。

② パフォーマンステストについては、6年間の見通しがまだ具体的に立っていない。英語教員が他学年にまたがって教えているため、先生達の負担が大きいという実態がある。今後の課題である。

Q2. パフォーマンステストについて、生徒は長い質問や、即興性のあるやりとりをしている様子が紹介されていた。それまでにどのような準備をしてきたのか。

A2. 方法としては、試験する相手をランダムに決め、直前まで誰と組むのか分からぬ状態でテストする。ペアを作ったところから廊下で点検する。テストの間、順番が来るまで教室で練習してもよいことにしていている。

Q3. 本年度、日向学院高校では60台ほどタブレットを導入したが、教員の方が不安に思っている。教員向けの研修があるのか。

A3. ベネッセよりICT支援委員が付き2回程度来てもらいサポートしてもらっている。使い方や教室環境の整備の仕方の研修を受けた。使うときは支援に来てもらうよう、臨機応変に対応してもらっている。

Q4. 中学校と高校の両方の指導をされているようだが、中学校での興味を持たせる授業から高校での受験指導までのつながりについて、指導する際の成功例や失敗例があれば教えていただきたい。

A4. 高校での授業は、1年間しか経験がないので何とも言えない。高校では、中学校と同様にICTを活用した授業を頻繁に展開していくと授業進度が追い付かないという課題が残った。生徒は楽しく取り組んでいたが、何をしたら力が付くのか、受験に生かせるかはあまり見えていない。

指導助言

- ・ 素晴らしい取組である。生徒も取組に対しての反応が良い。
- ・ 学校全体での取組になっていないことが課題である。いかに中・高・大が連携していくかは重要である。ぜひ実現してほしい。
- ・ 大学入試改革に関して、スピーキング能力を重視している割には、高校3年生ではスピーキングの部分が少ないのではないかと感じている。スピーキングの力をつけるためにも、授業でのスピーキングの展開を広げ、大学へつなげてほしい。
- ・ 4技能をどのように伸ばしていくかは、課題である。4つの技能それが文の構造や意味を理解するために関わっている。それらのつながりやメカニズムを意識して、中学校・高校の日々の授業の中で指導してほしい。
- ・ 日々の活動とパフォーマンステストの結びつきについて、何を目的にテストするのか、どういった力を見るためにテストするのかを明確にしておくべきである。
- ・ 生徒にとって楽しい活動ではあるが、その活動がどういうことにつながっていくのか、自分自身の学びになっているのか、生徒に何が残るのか、を考えるともっと良くなると思う。
- ・ ICTの活用がうまくできているが、やりっぱなしにならないよう、次のステップにどうつなげていくのかを計画し指導していくともっと力が付くであろう。
- ・ 生徒同士のインターアクションについては、ウォーミングアップで話す雰囲気を作るのもよいが、そこからステップアップしていく視点を入れると良い。
- ・ どんな観点で質問をするのか、訓練が必要である。どんなふうに質問したらいいのか、ストラテジーを確立することが大事である。いきなり難しい質問をしようとするのではなく、聞きやすいところから掘り下げていくYES/NOクエスチョンなどが効果的である。

第6分科会B（中学校）

ノートを使用した writing 活動の積み重ねによる output の工夫

～相手意識を持ったプラス1活動～

発表者 波多野 繭 教諭（大分県 日田市立南部中学校）

指導助言者 徳地 慎二 教授（宮崎産業経営大学 法学部）

司会者 江田 徳孝 教諭（大分県 日田市立大明中学校）

質疑応答

Q1. 言語活動の目的について、「なぜ」その活動を行うのかという視点で、生徒のモチベーションを上げるためにどのように導入部分でタスク提示をしたのかを知りたい。

A1. 修学旅行のそれぞれの経験を生かして、お互いのことを英語で伝え合ってほしいということが一番の願いでありそれを生徒にも伝える。今後、市内で協力しながら行政とも連携できるとよい。

Q2. プレゼンテーションを行うための知識・技能、プレゼンテーションを支える部分での思考力、判断力、表現力の指導で工夫した点（特に表現力の部分で強調して指導した部分）が具体的にあれば教えてほしい。（評価のモデルを示すことが指導の中で難しいと感じているため。）

A2. 1年生で受け持った段階から2年時のこの活動を説明して動機づけを行い、話す内容の優先順位をつけさせることで、相手意識をグループ活動の中で考えさせ、話す順番等を考えさせていった。

Q3. 2年の前期でリーディングが得意と答えた生徒が一番多いことに対する実際のデータは？

（大学生のTOEICの結果より、リスニングが苦手だと感じているが、実際はリスニングよりもリーディングが苦手な現状があるため。）

A3. 学力調査や定期テストの結果でも、リーディングがよくできる。授業様子を見ていてもその部分はスラスラ解いている。

Q4. ①総合の学習の時間に組み込んで実践したことだが、他教科との関りや苦労したこと、工夫点を教えてほしい。

②「相手意識」に対する評価を見取る際の工夫について教えてほしい。

A4. ①学年構成は4名4つの教科の教師が所属。

⇒パンフレットの作成は国語科、英語の文の作成は英語科というように指導の仕方を相談し、協力しながら作成を行った。

②できるだけ、苦手意識をもたないように、前向きに取り組むようにすることに留意しながら、英作文の作成段階では細かい訂正はあまりせず、意味が伝わるなどできるだけ点数を上げられるよう配慮しながら行った。パフォーマンステストにおいては、ALTに前向きなフィードバックをしてもらうように協力して行った。（1ずつできるようにするための工夫）

指 導 助 言

《指導助言者：宮崎産業経済大学法学部 徳地 慎二 教授》

- ・ 現在、大学ではキャリア教育を根底において新学部、新学科は設置することができない。
⇒ 「社会に出るために必要なのは」“自己発信力”（自分がどういう人間なのか）
⇒ 就職活動に直結する（自分をわかつていなければ就職活動はうまくいかない）その点で“自分プロデュース力”は大切である。
⇒ 生徒に気づかせるということはとっても大事。自分が何者かを気づけていない生徒の増加が昨今の課題。特に今回は相手意識をもたせる工夫の中で「自分と相手との比較」として他校との活動内容等の比較があつてよかったです。
- ・ ぜひ客観的な指標を用いて今後データをとっていってほしい。自分のやっていることを内省的に見ていくことが大切。

第7分科会B（高等学校）

I C T機器の活用による発表活動での英語力向上 ～長崎南高等学校S S H事業の取り組みを通して～

発 表 者 近藤 栄作 教諭 (長崎県 長崎南高等学校)
 指導助言者 山下 亮介 指導主事 (宮崎県 宮崎県教育委員会)
 司 会 者 比嘉 伝 教諭 (長崎県 長崎南高等学校)

質 疑 応 答

- Q1. 動画を見せた授業を展開していたが、詳しく教えてほしい。
- A2. スクリーンに映して見せる。ペアになり、一人が映像を見る、一人は教室の後方を向いて映像を見ない状態をつくる。映像を見ている生徒はペアの人に映像の様子を伝えるために、「なんとか英語で説明しよう。」と意欲的に取り組んでいた。相手が映像を見ていないので、伝えようとする気持ちが英語力を育む。また、その後に、映像の中の登場人物がどんなキャラクターだったかななどを発表させたり、Describe をさせたりと一つの映像で、活用法はいくつもあると思う。
- Q2. 「I C Tの目的と手段が入れ替わっていないか」と問いかけたが、先生はなんのために I C Tを活用されているのか。先生の考えを知りたい。
- A2. 黒板ではできないことを I C Tでやってみた。例えば家族の紹介や映像は生徒たちが楽しみながら英語を聞くことができる。しかし、黒板でできることをわざわざ I C T活用することは必要ないと考えている。目的と手段を明確にして、本末転倒にならないように I C Tを活用して英語の指導していきたい。
- Q3. 発表活動でどのように I C Tを活用したか例を教えてほしい。
- A3. ポスターを作ったり、プレゼンを生徒が作ったりするときに、英語での順番はどのような順番が良いか、生徒たちが思考しながら I C Tの活用をしている。この学校はパソコン室、図書館、授業室、S S Hルームなど、校内のあちこちにパソコンがある環境にある。また、タブレットの購入もしたので、教師ではなく生徒たちが自分で情報を取り入れたり、パワーポイントを作ったりなど I C Tを活用している。

指 導 助 言 《指導助言者：宮崎県教育委員会 山下 亮介 指導主事》

- ・ 学校体制で、全生徒に対して S S H事業の取り組みを行っているので、先生方の努力があつてこそ指導力の向上につながり、その結果、様々な成果を挙げられることが伝わった。
- ・ 時期学習指導要領の方向性と I C Tの活用、そして S S Hの関連について、現行の学習指導要領では4技能のバランスを統合的に身に付けさせるとあるが、次期学習指導要領はさらに深めるため4技能5領域の「やり取り」の能力が入っている。そこを生徒たち、どのように力を付けさせていくかがポイントになる。そのためには英語の先生方にも実用的な運用能力が必要になってくる。特

に「文法事項の指導においてどうするのか」という点で場面設定をし、意味のある文脈の中での指導が必要。そして「英語を使う必然性」を作らなければならない。その必然性を生徒にもたせるためにＩＣＴが一つの手段となる。ＩＣＴを使うことが目的ではなく、ＩＣＴを使ってどのように生徒に目的をもたせるかの工夫が必要。ＩＣＴなどの「ハイテク」な部分とポスターなどの「ローテク」の部分の共存が必要で、用途に合わせて使い分けることが必要である。

- ・ 英語教員として、教材を教えるのではなく、教材でどのように教えるのかというところを考えていくことが大切である。何を生徒に伝えたいのか。教員のゴールイメージがないといけない。目的のある授業は説得力があり、生徒の意欲も高められるので、そんな授業を開いてほしい。
- ・ 中学校と高校の学びの接続を今後も意識して指導に取り組んでほしい。時期学習指導要領では小・中・高の全ての目標が4技能5領域で設定されるので、高校の先生は中学校の授業を見たり、実態を知ったりすることが生徒たちの能力を伸ばすために大切なことである。

第8分科会B（中学校）

「21世紀型能力」育成の英語教育へのアプローチ

～ループリックの活用を通して～

発表者 松崎 綾 教諭 (福岡県 飯塚第一中学校)

指導助言者 松本 祐子 准教授 (宮崎公立大学 人文学部)

司会者 吉松 尚美 教諭 (福岡県 長丘中学校)

質疑応答

Q1. パフォーマンステストの中身を決めることに苦労する。習った文法を全部入れるのかどうか。

評価表に後置修飾は入っていないようだが、グラマーを重視するのかコンテンツを重視するのか。

A1. どちらも重視する。今回後置修飾は評価表に入れなかつたが、出来る子は勝手に入れる。ここでは関係代名詞のほうが有効と判断した。今回は関係代名詞をターゲットにした。後置修飾は他のテストの中でも評価できると考えている。教科書にパフォーマンス課題として単元の終わりに「スピーチをしよう」が載っている。それに準じるようにはしているが、目標として示すにはそれだけでは足りない。生徒がやりたくなるようなものに工夫する必要がある。

(＊同校教諭による補足) 関係代名詞は使わなくても2文で表現できるが、評価に入れることで子どもはどんな場面で関係代名詞が使えるかフィードバックすることができた。

Q2. 単元はいくつかユニットがあり、そのゴールはパフォーマンス評価で「スピーチをしよう」となっている。興味があったのは単元の目標のレベルが分けられていること。これは生徒それぞれが自分のレベルに合ったものを設定するのか、先生のほうである程度レベル設定をして、最終的にはレベル3を目指すのか。

A2. 目指すはレベル3である。今回のスピーチをただのスピーチで終わらせないように、色々仕組んでいる。今回の単元シートは9月から始まって11月まで使う。長いものなので、皆レベル1からスタートするが、そこに留まっている生徒も出てくる。そんな時に次のレベルを目指したい、とあえて思ってもらえるように設定している。レベル1、2で終わる生徒もいるが、できるだけレベル3で終わるように目標も考えた。

(同校教諭による補足) 協調学習がいかに機能していくかに焦点を置いた部分もある。レベル2では自分のスピーチ文と協調学習でやったことを比較することで、自分のものをより良くしていくという動機付けにした。

Q3. レベル1でとどまってしまった生徒も最終的にはループリックで評価するのか。

A3. 最終的にはループリックで評価する。大体の生徒がBまでは行く。しかしその上のA, Sまで目指してもらうことが狙いでもある。

Q4. 単元シートでは 3 つのユニットをまとめての目標だったが、日々の授業の組み立てはどうしているのか。

A4. 教科書の仕組みが Lesson 4 ~ 6 を勉強しないとスピーチにたどり着かない構成になっている。どんな内容を学習するかは事前に見ておく必要がある。ある程度の大まかな構成は単元シートを作るときに考える所以見通しを持つことができる。細かい授業構成はレッスンごとにやる。Lesson 4 の始まりでスピーチを取り扱うので、すべてがスピーチに繋がっていることを意識させる。そのための単元シートである。

Q5. 2 学期の評価の中に、パフォーマンステストはどう位置づけるのか。通知表の 5 段階にどのように反映されるのか。

A5. 話し方・伝え方は表現に。内容は知識理解に入れた。先に決めてある。あとはペーパーテストとあわせる。

Q6. ペーパーテストとの比率は？

A6. そこまで大きくない。2割くらい。単語テストやその他のテストも入る。

Q7. 2 学期はスピーチが大きなゴール。1 学期はどうだったのか。スピーチだったら協調学習がやりやすい。やり取りやリスニング、リーディングが大きなゴールだったら協調学習はどのように生かされるのか。

A7. 現在 1 年生をもっている。1 学期は他者を紹介する内容なので、単元シートを作りループリック評価を活用するのが基本的にはやりやすい。もう一つは ALT とのやり取りのテストでもループリック評価を使っている。もっと簡単にできるのは表現の練習で○文作ったら A, ○○の表現を入れる、などというループリック評価を作っておいて、生徒に持たせておく。手頃な物から作ってしまえば楽。

(同校教諭による補足) 3 年 1 学期は ALT の先生にインタビューさせた。廊下で 1 分間インタビューして、その後教科担に 1 分間レポートさせた。即座に自分の言葉で話すという部分では成績があまり良くなかった。

Q8. 協調学習をやり取りやリーディングの場面で使えるか

A8. ジグソーは使える場面が限られる。出来ても学期に 1 回。ただやれば効果があるわけではない。単元によって効果があるかどうかを見極める必要がある。東大のコレフ? のホームページに指導案等がある。高校の物が多く中学校では難しい、開発段階である。

指導助言

《指導助言者：宮崎公立大学人文学部 松本 祐子 准教授》

- 主体的・対話的な深い学びを実践のなかでどのように組み立てていくかがわかりやすかった。単元シートは学習者に見通しを持たせるのに効果的。学習者の悩みは「どうやつたらたどりつけるかが分からない。」という物が主であるが、段階的に次にどうなるかが示されていることはこのような悩みを解消できる。また文法事項で学習者がなぜ退屈になるかというと「それが何に役に立つか

が分からない」という部分が最終的なゴールとリンクして実践活動として反映されている構成がとても良い。

- ・ 協調学習・ジグソー活動の取り組みについて、自分の大学の授業で実践していて、有効性は十分理解しているが、全員を満足させるのは難しい。

Q1. 上位層・下位層それぞれに悩みがある。どう対応しているか？先生がどのように介入してうまくグループワークを成り立たせているか。工夫していることがあるか？

A1. 英語の授業は英語で、となっているが、ジグソー活動は英語では出来ない。しかし英語の苦手な子でも生徒の感想はみんな「楽しかった」。グルーピングを上手にする必要がある。能力的に厳しい子をうまく支えてもらえるようにグルーピングする。生徒の思考を止めないためにも、教師はあまり生徒に介入しすぎない。厳しい生徒の側で見守りながら、必要であればサポートする。基本的にはグループの中でがんばってもらう。そのためにはエキスパート（ジグソーの手法）の資料が重要になってくる。

Q2. 先生の役割という点で、単元シートの各セクションで生徒に自己評価させているが、先生はどのようにフィードバックしているか。またスピーチの書き直し・リバイズの段階で先生はどのようなフィードバックをするのか？

A2. 単元シートはレッスン毎に自己評価させ、書き終わったら回収し確認する。ラインを引いたりする。子ども達の考えがどう深まっているかを見る手立てなので、チェックしたら生徒に返す。生徒が自分を振り返ることが大事。スピーチは自分で一度書いた物を消さずにリバイスさせる。どんな風に変わったかをいくつか紹介し、生徒に共有させる。最後に全員スピーチをしたが、聞き手と話し手が共に作り出すようなスピーチができた。

Q3. スピーチストラテジーとしてはうまく使っているが、文法的には違っているものが出でてくる。このような場合はどのようにフィードバックするか？

A3. 一度生徒にリバイズさせて、回収して確認する。ALTに見てもらったりする。最終的には完成した物をスピーチとして使う。

Q4. パフォーマンス課題には難しさがある。人前で表現することがとても苦手な生徒への評価の多様性は？

A4. 実際大きな声で表現できない生徒もいる。筆記試験では点が取れるのに、パフォーマンステストでは恥ずかしさが先に立つ生徒もいる。生徒を知っているからこそ難しいが、現在は評価表の基準で評価している。今後の課題である。

これからは発話が苦手な生徒は書く段階での評価や、プレ発表時の小集団での評価も入れるなどの多様性も必要になってくると思う。

第9分科会B（小学校）

小学校外国語の特質に応じた学びの本質に迫る授業の創造 ～相手意識をもってかかわり、豊かに自己を表現しよう とする子どもを育むための学習指導の工夫をとおして～

発表者 齋藤 匡 教諭（宮崎県 宮崎大学教育学部附属小学校）
 指導助言者 アダチ徹子 准教授（宮崎大学大学院 教育学研究科）
 司会者 別府百合亜 教諭（宮崎県 宮崎大学教育学部附属小学校）

質疑応答

- Q1. 先生の考える「思いが伝わる子どもの姿」「思いを伝えている児童の姿」のイメージとは？
 A1. 「知っている英語から、使える言葉を積極的に取り入れている姿。」「みんなが理解できていない時にはジェスチャーが入ってくるような姿」をイメージしている。
- Q2. 思いを伝えるために思考する際、全体にどのような発問をして広げていったのか？
 A2. 「自分と仲間が知っている英語を使おう。」「自分と仲間で協力して作る」ということを単元を通して意識させた。教師やALT、友達に頼るのではなく、「自分出発なのだ」ということを意識させている。
- Q3. 自信のない児童が相手意識をもって積極的に取り組むにはどうすればよいのか。
 A3. 自己評価と実態が離れていることがある。次時の計画をする際、苦手意識をもっている児童、その子一人のために計画をすることもある。しかし、個人を見ることも大事だが全体を広く見ることも大事だと思うようになった。
- Q4. 文科省からの評価の指針やCan Doリストもない中、『思いが伝わるポイント』として、どのようなことを子どもと共通理解してやっているのか。
 A4. 表情を出すことはもともとできていたわけではない。繰り返しやっていく中で態度面でも積み重ねていくこと、「me, too」などの語彙に慣れ親しんでいくこと、どちらも大切だと考えている。

指導助言 《指導助言者：宮崎大学大学院 教育学研究科 アダチ 徹子 准教授》

- ・ 授業は、授業者の思いや哲学が投影される。小学校外国語活動の初期段階で「I want to be a ...」と貼ってあるカードの中から1つ選んで発表するという授業をやっていた時代もあった。それから、様々な工夫がなされた。「本当のこと」を言わないと盛り上がらないことに小学校の先生が気付いた。キャリア教育と連携させて職業のことを調べたり、10年後の自分の姿を想像して絵に描いて発表したりと様々な工夫がされるようになってきた。ビンゴゲーム等の様々な活動で、一見盛り上がって活発に英語を使っているように見えることがあるが、そこでは自分のことは何も話していない。外国語教育は「自分の本当のこと」を話すことが必要である。小学校の先生方のコミュニケーションの考え方方が中学校・高校に影響した部分はとても大きい。
- ・ 齋藤先生はこれまで、「誰かになりきる」「クイズに仕立てる」という活動を実践している時期があった。どちらも楽しい活動ではあったが、それではダメだと考えられた。そして今は、「自分の思

い」を充実させるという風に変わってきた。「表現内容」「伝え方そのもの」に目を向けている。

- 既習事項をもっと使わせたらどうか?という指摘がよくあるが、無理強いさせることになる。子どもが自発的に使うことが大切だと思う。自分が言えることを頭の中から探ると、内容も充実するし、相手も楽しいと思えるコミュニケーションになる。何を言えば私の思いが伝わるのかと考える。そこに話し手の創造性・選択がある。聞き手にも相手の思いがより伝わって共有でき、人間関係がよくなる。
- 子ども同士で内容の充実を図ったりアドバイスをし合ったりするのはマネジメントが大切になってくる。日本語が多くなりがちなので Your turn. How about you?などを教えることも有効である。
- 繰り返しドリルは必要だが、外国語教育は心を無視してはなされない教育である。機器を使った教育だけで上達するものではない。子どもの人格教育・健全な教育をねらっている先生たちだからこそ、機器ではできない教育ができるのだと思うし、必要なのである。

第 6 6 回九州地区英語教育研究大会日本ひなた宮崎大会 経過報告

大会実行委員長 菊次 淳

日程			事業名称
平成 28 年度			
10	25	火	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 1 回準備委員会
平成 29 年度			
5	15	月	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 2 回準備委員会
7	13	木	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 3 回準備委員会
7	14	金	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第 1 回連絡協議会
7	19	水	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 1 回総務委員会
8	25	金	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第 2 回連絡協議会
9	13	水	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 4 回準備委員会
9	27	水	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第 3 回連絡協議会
10	27	金	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第 4 回連絡協議会
11	9	木	第 6 5 回九州地区英語教育研究大会長崎大会視察
11	10	金	
11	22	水	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第 5 回連絡協議会
12	7	木	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 2 回総務委員会
12	8	金	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 5 回準備委員会
12	15	金	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会基調講演者との連絡協議会
2	17	土	九州地区高英研事務局移管（長崎県→宮崎県）
2	20	火	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会第 3 回総務委員会
3	12	月	平成 30 年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第 6 回準備委員会

日程			事業名称
平成30年度			
4	26	木	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第4回総務委員会
5	7	月	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第1回実行委員会
5	11	金	九英連第1回理事会・九英連 第1回出版委員会
6	22	金	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第6回連絡協議会
6	29	金	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第5回総務委員会
7	3	火	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第2回実行委員会
8	22	水	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会小中高事務局長会議
8	28	火	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第6回総務委員会
9	14	金	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会第3回実行委員会
9	14	金	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会各種委員中高合同会議
9	14	金	平成30年度九州地区英語教育研究大会宮崎大会公開授業第7回連絡協議会
10	12	金	第66回九英連日本のひなた宮崎大会 リハーサル
10	18	木	九英連第2回理事会・九英連第3回出版委員会
10	18	木	第66回九英連日本のひなた宮崎大会 前日準備
10	19	金	第66回九英連日本のひなた宮崎大会 第1日目
10	20	土	第66回九英連日本のひなた宮崎大会 第2日目
2	22	金	九州地区英語教育団体連合会事務局移管（宮崎県→沖縄県）

編集後記

無事に第6回九州地区英語教育研究大会（日本のひなた宮崎大会）を終了することができました。まず始めに大会運営に携わってくださった皆様、また大会に参加してくださった皆様に心より厚く御礼申し上げます。

本大会では九州大会としては初めて小学校の公開授業を行いました。「小学校の先生方が一生懸命取り組まれている授業実践をぜひご紹介したい」、「宮崎県の小中高校の英語教育はこんなふうにつながっているということを皆様に知ってもらいたい」などいろいろな思いを持って準備に取り組んでまいりました。多くの先生方から「参考になった」とご好評をいただきました。公開授業校である西池小学校の金丸睦子先生、生目南中学校の小川馨先生、高鍋高校の肥田木洋之先生をはじめ、児童・生徒の皆さん、関係者の皆様にこの場を借りて深くお礼を申し上げます。

熊本大学大学院人文社会科学部長嶺寿宣准教授には、大変お忙しい中、基調講演と公開授業の指導助言の両方をお引き受けいただきました。基調講演では最新の研究による我々教師が陥りやすい誤りをわかりやすくご教示いただき、毎日の授業にすぐにでも応用できる様々な提言をいただきました。また公開授業、分科会の指導助言者として、8名の大学の先生方、9名の指導主事等の皆様にご協力いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

私たち小中高の事務局長はそれぞれの勤務校での通常業務に加えて、県レベルの事業を組織運営し、同時に今大会の運営にあたりました。宮崎県小中高校の総務委員、協力委員の先生方には十分な説明のないまま、業務をお願いした場面も多くあったかと存じます。それにも関わらず多大なるご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会開催にあたりご尽力いただいた九州各県の高英研・中英研の会長をはじめとした役員の先生方、大会運営に携わったすべての方々に感謝申し上げます。そして何より、九州・沖縄各地から遠路はるばる宮崎までお越しいただき、大会に参加してくださった皆様に厚くお礼申し上げます。今後とも「九州はひとつ」の信念のもと、九州・沖縄全体の英語教育がますます発展しますように心より祈念しております。

大会実行委員長 菊次 淳（宮崎県立宮崎北高等学校教諭・宮崎県高英研事務局長）

大会副実行委員長 山下 紀子（宮崎市立櫻中学校教諭・宮崎県中英研理事長）

大会副実行委員長 岩切 宏樹（宮崎市立赤江小学校指導教諭・宮崎県小外研事務局長）